

作品発表記憶

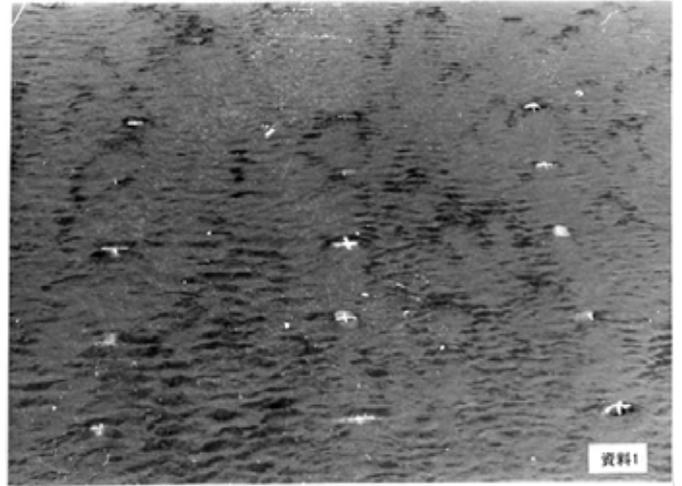
1969 年より個展をはじめ 1969年9月 〈10キロメートルのイベント〉 と称して、

●京都・加茂川の上流雲ヶ畑の川床・約5m四方に漬物石大の川石を10数個置いた。
それぞれの石には、台所などで使用する防水用アルミ粘着テープをはちまき状に巻いて、そのテープの連なりで5m平方の矩形に見えるようにした。

●雲ヶ畑から約10km下流の三条大橋のたもとの川床に、5m間隔で数十個の漬物石大の川石を置いた。

それぞれの石には、同様のアルミ粘着テープを十文字に巻いて5m間隔に置かれた石と石とを十文字の延長が繋いでいるふうに見える様にした。

ゆく川のながれは絶えずして、しかも もとの水にあらずや てな具合-----・・・資料1



1970年12月 東京・神田の田村画廊で、画廊を使った初めての個展をひらく。今でいうインスタレーション(仮設展示) 的な作品で、画廊内に石・紙・ロープ・電気のコード・鏡・布などを、日替わりメニューよろしく、毎日展示を変えるといった方法でおこなった。・・・資料2



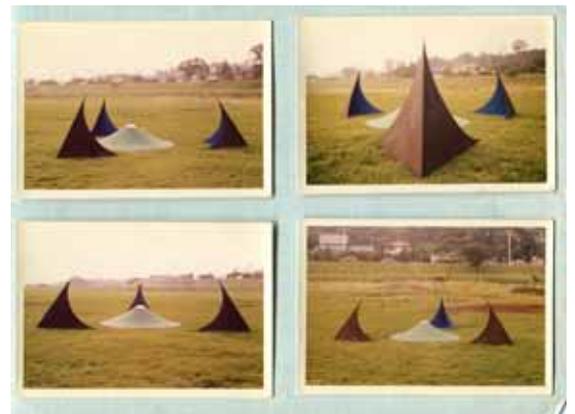
1970年の第1回箱根彫刻の森のコンクールの、権威的な二重・三重(?) 構造/招待・賞・一般公募 に一般応募の形で釘をさす。

円形のテントを取り囲むように置かれた3組の造形物は薄い鉄板によるもので、渋谷・道玄坂の砂川鉄工所に発注した。正三角形の一边を円弧でカットした鉄板3枚のエッジどうしを溶接し、立体化させ、内側を青色に塗装、外側は黒サビを蒸着させたもの。中央のテントは、京都・東山・三条の一澤帆布店で先代にムリを云って作ってもらったもの。緑色のテント地の布をバイヤスに裁って縫製してくれた。真ん中の支柱の頭は、鏡面アクリルの半球型で、内側には溶かした石膏を入れて、支柱を固定した。

まだ、ロッキード事件が発覚する前で、私としてはフジが出現する前の作品であったが、もうすでに、黒い疑惑機の尾翼がフジ状テントのまわりにきちんと構成されている。

応募の結果は、案の定“落選”。それ以後「作品」に金をかけることも、ヒトに審査されることも、ヒトを審査することも、するまいと決意した。(幼児の絵の審査には数回参加してしまったな?)

また、落選した「作品」は、ゴミ同然とされることも、カッコがとれた作品とは人々にみられてはじめて成立することも知らされた。案の定と書いたが、「ひょっとすれば-----」なんて一縷の希みも正直あった。



ちなみに、応募作品の搬入場所は、神宮絵画館裏の空き地。この写真は、搬入直前に巨人軍・多摩川一軍練習場（大田区 田園調布）にて撮影した。

これは、発表歴には入らない。

・・・資料3

釘をさすといえ、1969年10月〈京都府洋画新人展〉京都府ギャラリーで、貼り替えたばかりの壁布に五寸釘を8本打ち込み2枚の大判のケント紙どうしの間隔をちよっぴりあけて壁から100mmほど浮かせて固定した。その紙の前には、斜めに切断した大樹の幹を縦に貫通する様にステンレスパイプを床から天井に届かせて立てた。

・・・資料4

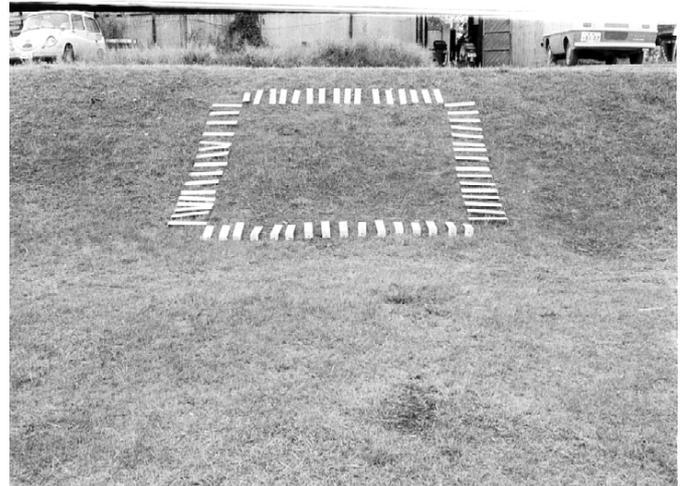


同年同月、鴨川堤と、京都市内の百貨店などを会場として催された、〈野外造形 '69〉に参加。

- 白く塗装された小さなL字型の鉄板を数十枚、川の堤の短く刈り込まれた草原に矩形になるように打ち込み、その真ん中に小さめの矩形に切った生成りの綿布を数枚重ねて敷き、布と草との境目に上から白い塗料を撒き散らす。
- その現場から打ち込んだ鉄片と綿布は取り除き、撒き散らした塗料の痕跡だけが鉄片と布の形をとどめている。

● 撤去した鉄片数十枚は、元の現場の川向こう・対岸の斜めに切り立った堤防の草原に再び最初と同じ矩形に打ち込んだ。数枚の端に白く塗料が垂れて染みている綿布は、サブ会場とされていた四条通りの藤井大丸（現、フジイダイマル）の、二階から五階までの階段の踊場の同じコーナーに置いた。・・・が、数日たつまでもなく担当のオソウジオバチャンによって、ゴミとして捨てられてしまった。

かたわらに、作品？とおぼしきタイトルもなにも無く、商業空間内の由々しきシロモノは当然忽ちゴミと見なされた。早速私は、展事務局に抗議はしたものの、オバチャンの判断は間違っていなかった。・・・資料5



この反省から1970年8月の〈現代美術の動向展〉 京都国立近代美術館 では、自ら展示物を会期中に片づけた。と、いうのも実際はこの年の4月から東京住まいになった私は、京都在住の友人に撤去の作業を託したのだったが・・・

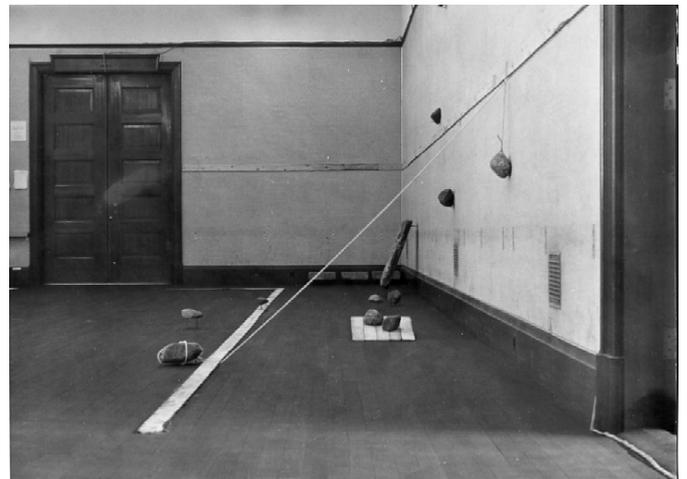
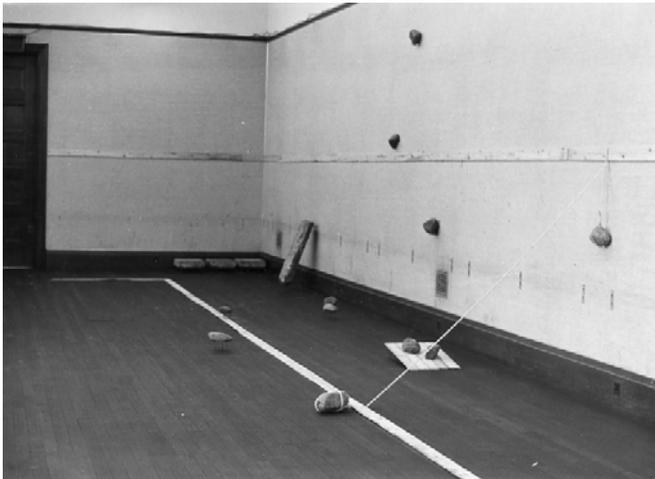
●ベッドのシーツ状の同じ大きさの綿布数枚を五寸釘で壁に留めるが、或る布は釘一本だけで、又、或るものは三本の釘でと・・・それぞれ釘の数によって留められた形態が異なる様に設置した。それともう一組、美術館の1階と2階（ここは確か、事務室の前だったが）の階段の踊場の隅この天井と床に二枚ずつの綿布を貼り付け設置する。（その他二種類の設置物があったが、ここでは省略する）

●これらの設置物を展覧会会期中、電話で指示し、それぞれの綿布の半分ほどに、ハサミで切れ目を入れてもらう。
●切れ目の入った布は、最初とはちがった状態で暫くの期間置かれるが、再び電話による指示で、それぞれの綿布を完全に取り払ってもらい、会場に残されたものは、一番初めにシーツ状の綿布を壁に留めた五寸釘の数々。そして、2階と1階の同様のコーナーの天井・床に残された両面テープの残骸だけが残るといったものだった。

・・・資料6



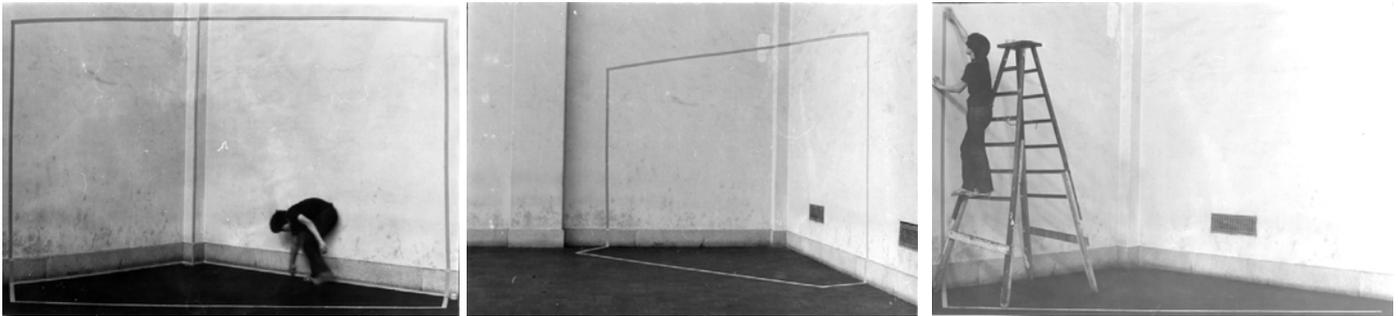
1971年11月〈すっかりダメな僕たち〉展を京都市立美術館+京都書院4Fで開く。京都アンデパンダン展の常連たちで自主的にもっていた“次元展”なるものが、数回開催の後、“次元‘69’”を最後に途絶えてしまったことから、次のような呼びかけをするに至った。対象は“次元展”“京都アンデパンダン展”への出品者や、ギャラリー16を使う作家たちにむけて、只単に「展覧会をやるから、参加出品して！」というのではなく、「それへ向けての“集会”を開く」というものであった。数回の“集会”の結果、20人の作家でこの展を持った。・・・資料7



《表現現場‘72’の美術手帖企画で、この展以来京都での（大阪でも一回やったが）一連のグループ展の頃、ズウ〜と事務局（長は付けなかった）だった 鈴木重夫と連名で、タイトルに代えて----というタイトルをつけ、〈すっかりダメな僕たち〉展を文章化した。ちなみに、当時の手帖編集長は、鼎談氏の一人、福住 治夫氏。

1972年8月 前回と同じ会場で、〈すっかり・・・〉のメンバーに東京からの数人の作家たちを加えたおかげで、展のタイトルも〈活躍する僕たち〉展。

ここでは、大展示室のワン・コーナーにガムテープを貼った。三脚に固定させたカメラのファインダーからそのワン・コーナーが覗けるようにセットしておいて、ファインダーのフレームに沿った矩形になるようにガムテープを展示室のコーナーの壁に貼っていった。カメラのファインダーを通して見ると矩形に見えるが、実際のガムテープによる形は、矩形からは、ほど遠いものだった。・・・資料8

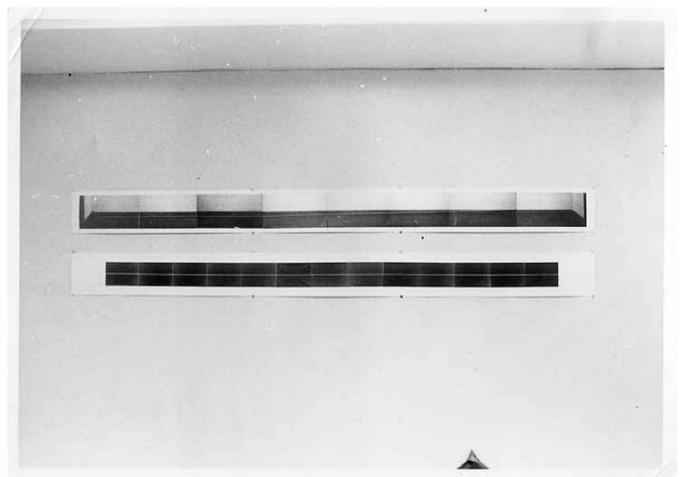


会期中、東西の若手作家らが一同に会すというので、これまた当時若手編集者だった鼎談氏のもう一人、篠田 孝敏氏が、デンスケ（録音器）かついでわざわざ、東京の美術手帖編集部からシンポジウム会場の京都書院ホールまでやって来たけれど、シャイな僕たちは、そうでない東西の論客二人を除いて、皆ダンマリを決め込んだ。その後の二次会のビアガーデンでは、たいそう盛り上がったが・・・



かなりの後日談だが、篠田氏はやはり若手だった、当時の編集者S名氏とジャンケンをし、負けて京都に回されたとか・・・「ともかく目の前真っ暗になった」らしい。S名氏はと云うと、大阪のやはり若手ハプニング集団の THE PLAYの方に赴きしっかり取材したという。いまだに篠田氏は、何かにつけて繰り返すことしきり、余程この時のことを根に持っている。

1972年7月 村松画廊（東京/銀座）の個展では、同年2月の〈1972 京都ビエンナーレ〉の細い綿ロープによる作品（京都市立美術館の大きい展示室の大壁面の下方の片隅の床に最も近い部分に五寸釘を打ち約30メートル先の壁面に最も近い床面に打った五寸釘まで綿ロープを斜めにピンと張ったもの・・・資料10を8分割して真横から撮影した壁際のロープの写真などを展示し、展示期間中毎夕刻には、8mm映像フィルム（マガジン・フィルム一巻の限定時間3分余にこだわって作ったもの10数巻）をクラシック音楽テープ（カセット・テープではない幅の広いテープ）にシンクロナイズさせて、上映した。



この8mm映像作品は、1988年2~3月、目黒区立美術館での〈現代美術としての映像表現〉に上映出品後、当美術館に収蔵された。ちなみに私の手元には、8mmフィルムからV.T.R.にデュープしたものが収蔵と引き換えに残った。

1973年6月 現在では、オフ・ギャラリーなどと称される様だが、街の貸し画廊空間（当時、既にここでもう何を並べても、何をやっても「美術」と見なされるべき、やる側・見る側との約束された空間となっていた）等を使用せずに作家それぞれの「私」の空間で自作を展開しようと意気投合し集まった面々、とは云っても、ほとんどが、神田の貸し画廊でただ酒飲んで青き“芸術論”をたたかわせていた常連たちだったが、核になったのは、1970年 横浜・戸塚スペースで野外展をもった四人だったが、その後私も含めて、新たな展への賛同者が10

人になったこともあって、点々バラバラの10人による「私」合同展ともいうべき「点展」と名乗った。

ポスターは既成の大型地図（関東地方一円のもの）に、それぞれの作品展示場所をピンクの丸で示したものをシルク・スクリーンで印刷し、展のリーフレットも簡易印刷でと全てメンバーによる手づくりのものであった。

私は、自宅庭（当時、大田区、田園調布在）の敷石や、木造家屋の羽目板等に石膏の粉を溶いたものをなすりつけたり、綿ロープを内臓した長い三角錐の棒状の石膏を庭の大樹の幹に取り付けたりブロック塀の外側にぶら下げたりした。

・・・資料11

この“展”はその後メンバーの離合集散もあつたりして、翌・翌々年と三回もつたが、しばらく間をおいた後1977年7月の、別のビルの地上階に移転する直前、地下の村松画廊での前後期二部に別けての集合展で、一応幕。

私はその後二回の自宅個展（1981・1~2と1982・5）も「点展」と称し、同展同人の長重之と二人だけで群馬・桐生の喫茶店と東京・蒲田のギャラリーで「点展」と銘打って作品展をもつた（1984・11~12）



1973年8月 〈静けさと蝉の声=表現物と表現理論〉展 京都市美術館 では、美術館の大きい壁面二面に大判のケント紙を上下に二段、横に五列、一定の目地を空けてなおかつ全体が少し右上がりの傾きをもつ様に貼り、美術館の展示用壁面の下方を支配しているスチール製の大型タブロー受け（これは、少々説明が必要だ。・・・東京都立美術館と同様に、京都市立美術館でもご他聞にもれず、酷暑の夏を除く三季、即ち初春・春・秋には、日展をはじめ、数多くの公募団体の展覧会が開かれる。その際に大型絵画の額縁受けに利用されるべきもので、この館独特のものだと思うが、かなり丈夫なスチール製のもので、物質感・物量感ともに頗る目立ち、会場に作品が展示されていない時など、一見ミニマル・アートじゃないかと見紛う出来栄えのもので、床面と平行に、彫刻展示室を除く全展示会場の壁面下方をぐるりと一回りしている）

斜めに貼ったケント紙の下方部分をそのスチール製の受け金具と平行に折り曲げて展示した。

・・・資料12



月刊誌・美術手帖の展評欄（当時、関西の展評担当は、同館学芸員だったH野氏による）で、作品内容には一斉ふれず、私の展示作業現場だけを取り上げて、「空しさと玉の汗」とか、この若き「肉体派無産居士」と書かれたことを今でもよく覚えている。

これと同様の展示は、1973年12月 田村画廊での個展でもやったが、勿論ここには受け金具など無いから、床（地平・水平）に平行に折った。

又、月曜から水曜までのたった三日間のこの個展には、ワラ版紙にガリ版で印刷した、次の文章を付けて案内状とした。

かずかずの うそうそしい言葉より

たったひとつの嘘が大好き

この歌を 八田 淳からもらったのは、ちょうどおとしの秋であった。彼の体軀に似つかわしくない弱々しくも傲慢な感じがして、正に彼の素性をあらわしているようで図らずも頬がゆるんだのだが、これをまでもウソとしてしまう彼には、テレ以前のまことしやかな **sensibility** を覚え“弱き故の表現”がかるうじて彼を成り立たせている（？）のでは、あるまいかと思う。

‘70年 京都近代美術館の現代美術の動向に出品した、徐々に消えゆくプロセスを示したものや、又’72年 京都ビエンナーレの壁から床に向かって奇妙な斜角をもって張られた一本のロープや、‘73年 京都アンデパンダン

展の斜めに置かれた赤い二枚の板、同じく'73年 京都ビエンナーレでの、ロープを内蔵した石膏の棒など、これらの作品において、彼の視点が根ざしているのは“隠蔽”という、彼特有のロマンであろうことは、それまでの作品につけられた CUT というタイトルを見ても察することが出来るのだが、あからさまな積極性 乃至 消極性を欠くロマンチストに、今尚 少なからぬ疑問が残るのは私だけではないであろう。

シリアスごっこを忌み嫌う彼にとって、今回の個展が果たして彼の隠微！な二面性を示すか？それとも華麗？な二面性を示すか？非常に興味あるところであるが、少なくとも 八田 淳個人にとってある種のエポックを感じずにはおれない。

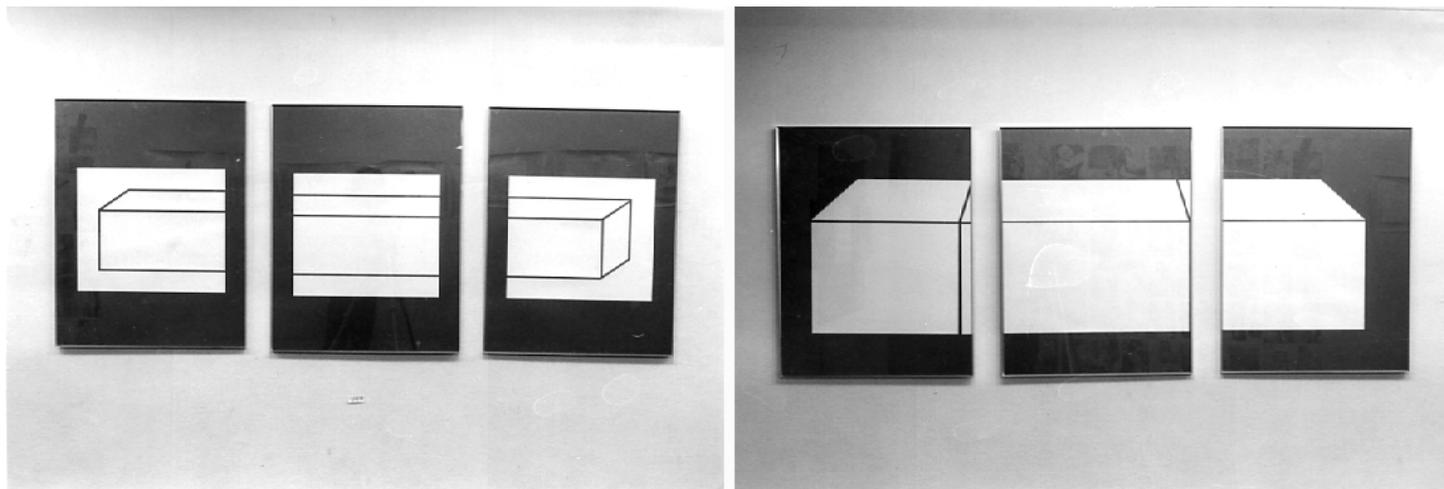
返歌

あさっても あしたも 今日も
きのうにも ころならずも 心あるのみ

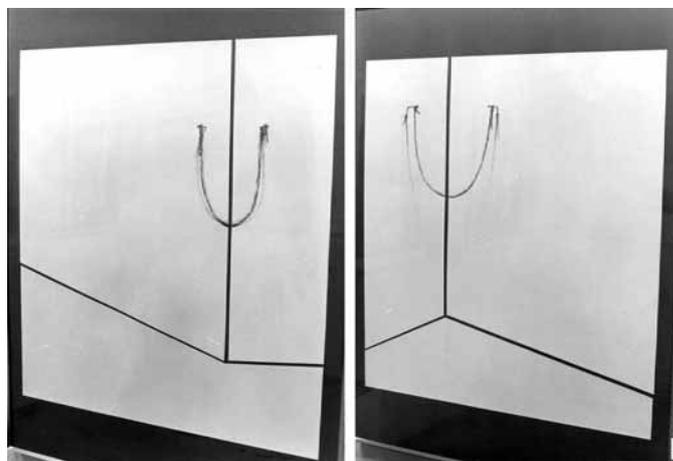
1973年11月 京都にて
マイケル・ローズ

1974年4月 〈ALL OVER & OVERALL〉展 アート・コア（京都）

- 白色紙片 4 枚・3 態を、それぞれ額装したもの 3 組でワンセット
 - 白色紙片 4 枚と 3 枚と 2 枚の 3 組を、それぞれ額装したものでワンセット
- いずれも タイトルに“PAPER INCLUDING BOX”とあるように 3 組連続でひとつの長形の箱と三つの立方体形の箱があらわれる様に、錯視を利用して見せたもの。 資料 13



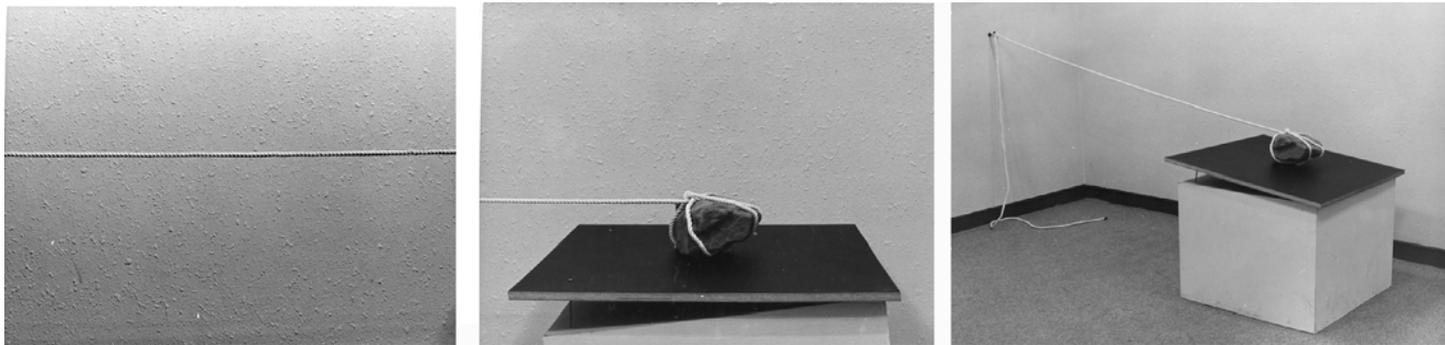
次の月 5 月には、〈一週間ずつの 10 人による回顧展〉と銘打って ギャラリー-16+ONE 2F（京都）で、行なった。斜めに CUT した 3 枚のケント紙をずらして目地を際立たせ、縦の目地にまたがる様に二つの壁に打たれた（2 枚のケント紙に描かれた）2 本の釘を一方は凹んだ壁に、もう一方は凸の壁に見えるように、ロープで結び渡した状態を、鉛筆でドローイングし出品した。 資料 14



又、低い台の上に斜めに置かれた板、この板の四方には五寸釘が打たれているが、前後二本づつ釘の出し方を変えて板自体が傾斜している。板の上に綿ロープで結わかれた石が置かれ、そのロープの一端は、前方の壁に打たれた

釘まで板の傾きと同じ角度で延びているように設置したもの。これを真横から撮ったモノクローム写真二態も、壁に掛けた。

・・・資料 15



これと同じ頃に撮った未発表の写真があるが、同様の仕掛けだ。

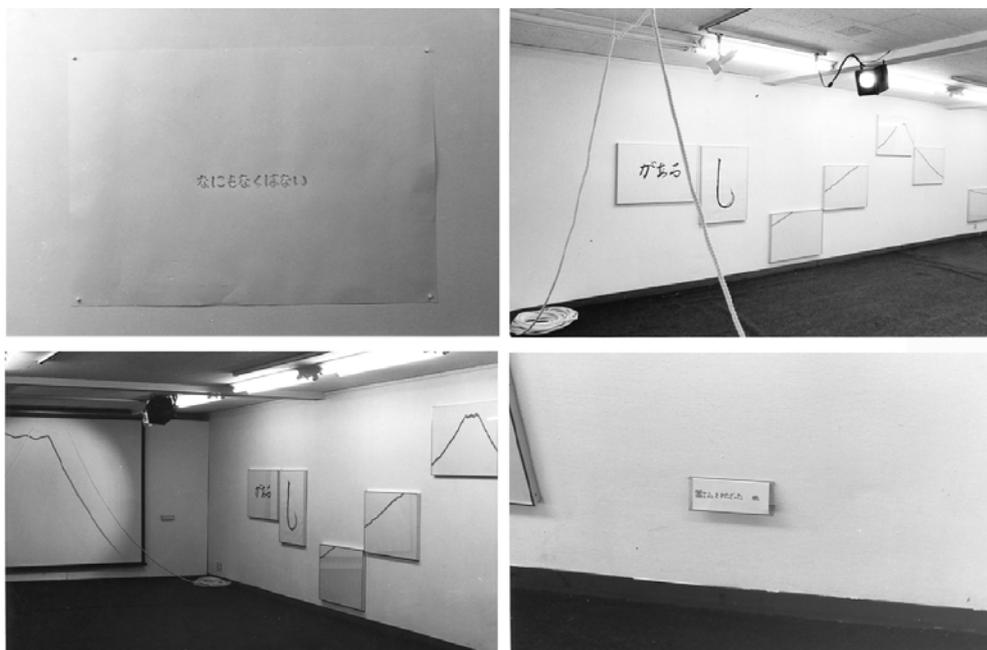
・・・資料 16



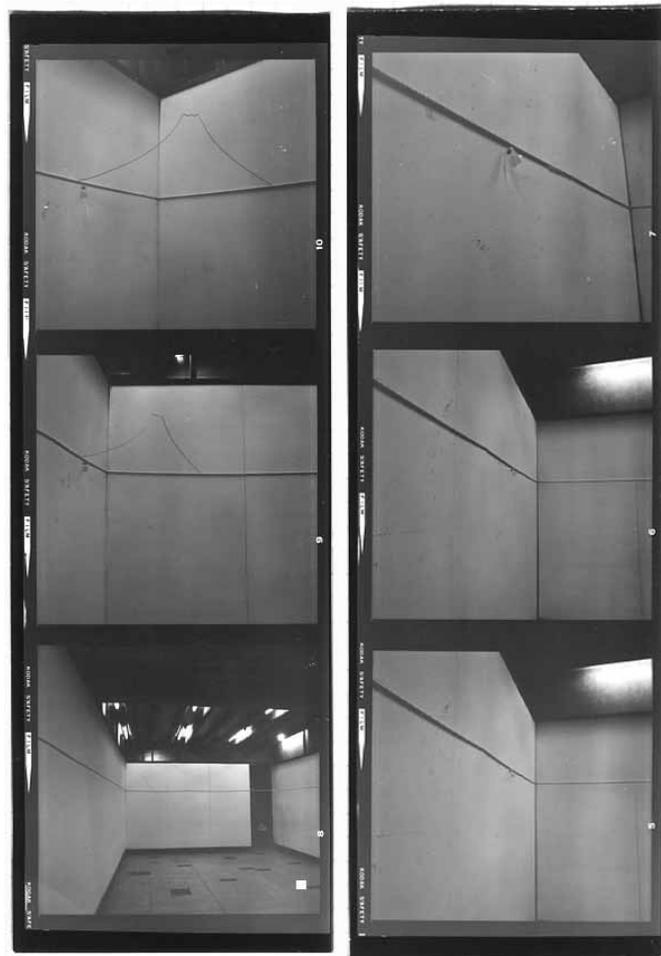
フジのはじまりは、1975年の〈アート・コア 8月展〉(京都)からだ。一人一週間ずつ、数人の作家による連続個展の中でのものだった。

画廊の壁面を一回りする形で、文・哲学的(?)表現を、やってみんとした。「なにもなくはない」というひらかな8文字を横方向に切り抜いた白い大判用紙を、まず壁に画鋏で留め、次にフジの形に見えるように天井から吊り下げた綿ロープにプロジェクターから投光し、壁ぎわの映写用スクリーンにその影を投影した。スクリーン右下方にはタイトルの形体で、「富士山をかたどったロープ」という小さな文字板を置き、さらに「がある」の三文字を大書きした書と、「し」の一文字を大書きした紙をガラスの入った版画用のシンプルな額縁に入れて、壁に掛けた。大判用紙の額装はなおも続いて、手で破った紙の破れ目があらわになるほどにその紙を少し上下にずらすことによってできる目地。その目地全体をつ

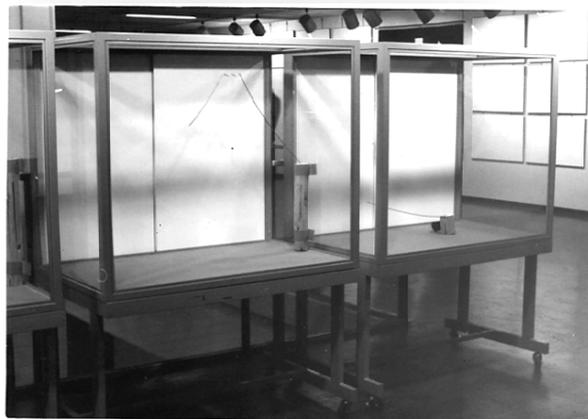
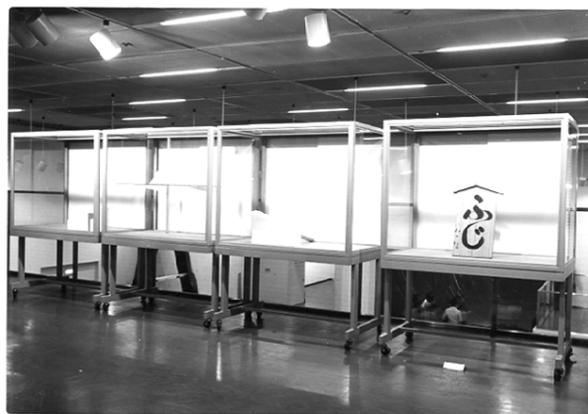
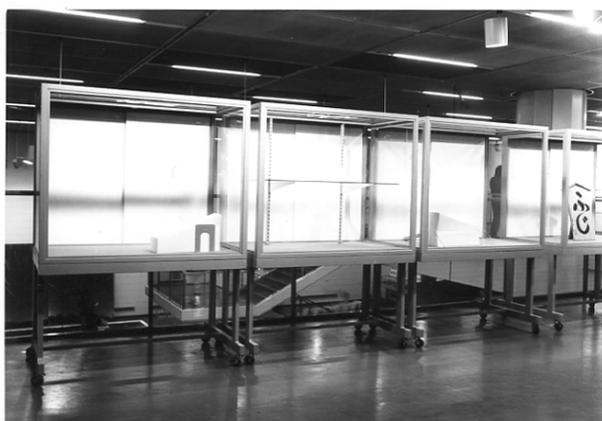
ながりを見るとひとつの大きな「フジ」の頂上部分と左右両裾野の部分とに5分割したものと分かるが、それぞれを額装し、壁に掛ける。「富士山をかたどった紙」というタイトルもどきの文字板に、「もある」「じゃない」「か」を書いた大きい3枚の紙もこれまた額に入れて、壁に掛け、画廊を右方向に一周する。「なにもなくはない」と最初に切り抜いた紙片を今度は縦方向に、これまでと同様のシンプルな額縁のガラス面に直接貼りつけておしまい。芝居で云えば柝の音が入る・・・資料 17



1976年3月 田村画廊での個展では、海の水平線に見立てたロープを私の目の高さに合わせてギャラリーの四方の壁を巡らせ、その一角に針金でフジの形を作って、置いた。ロープと針金には鉛の刻印で荷札に“ウミデナシ”“フジデナシ”と打ち出したものをくくり付けた。
資料 18



同年10月の〈EXHIBISM'76〉神奈川県民ギャラリー（横浜）での作品は、ギャラリー備え付けの展示ケースの中に、私の針金フジと、それを定規にした同形だが破れ方がそれぞれ異なる約400人の中学生のフジを集めた紙の集合体3体（頂上と両裾野）を展示した。資料 19
針金フジは、この頃から出現してきた。



- 1977年8月 〈いとやんごとなききわにはあらねどすぐれてときめきたもうありけり〉展 京都市立美術館
- 壁面に畳二枚分程度の大きさの白い綿布を張り、下辺中央部から右辺中ほどにかけて鉄をいれ、ゆるやかな斜めのラインでカットする。
 - 細いロープを通された紅白幕（店舗の軒下用の幅の細いもの）を、壁に張った白布に重なる様に前面に壁から少し浮かせて張り、白布の切断面（フジの裾野）にあわせてフジの頂上部分を紅白幕にもカットする。
- ・・・資料 20



- 1978年1月 〈厚顔のものたち〉展 ぎやらりい・どり（東京・渋谷/公園通り）
- 紅白幕の一部をフジの裾野状に裁断縫製し、太目の針金を幕のすそに通して頂上部分だけを幕の外に出して折り曲げてつくったものを壁にPIN UPする。
- 同じ壁の右下隅に、小ぶりだが、少し立派な？額に入れたタイトルをつけた。
- 白地に紅い丸の紙にプラスチック製の簡易打ち出し文字で、ペラペラノフジという-----

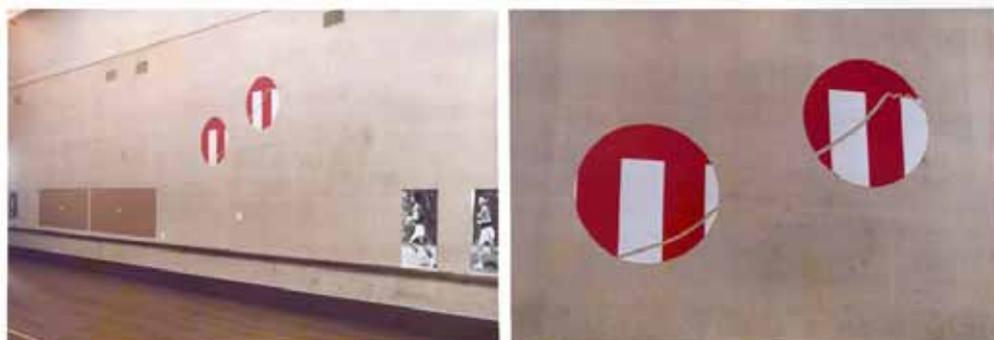
・・・資料 21



- 1978年3月 〈20年目の京都アンデパンダン〉展 京都市立美術館

紅白幕を二つの円形に裁断。フジの頂上部分と裾野部分とに切断し、少しずつ目地を出し、二つの円形紅白幕でひとつのフジになる様に壁に貼った。

・・・資料 22



写真とフジとの組み合わせの始まりは、1978年10月（'78年10月展）大阪府民ギャラリー／1980年1月の〈ドローイングによる企画〉はまのや画廊（東京／銀座）の作品からで、既成のカレンダーの写真を使用した。ミシン目で分断したものを/カッターナイフで切断し、再び少しずらして貼り合わせたもの/点字用の点筆で突いたもの。いずれもカレンダー1・2月におさまりの富士山の写真の稜線をなぞってのものだった。“さんみいったいのフジ”とタイトルをつけた。

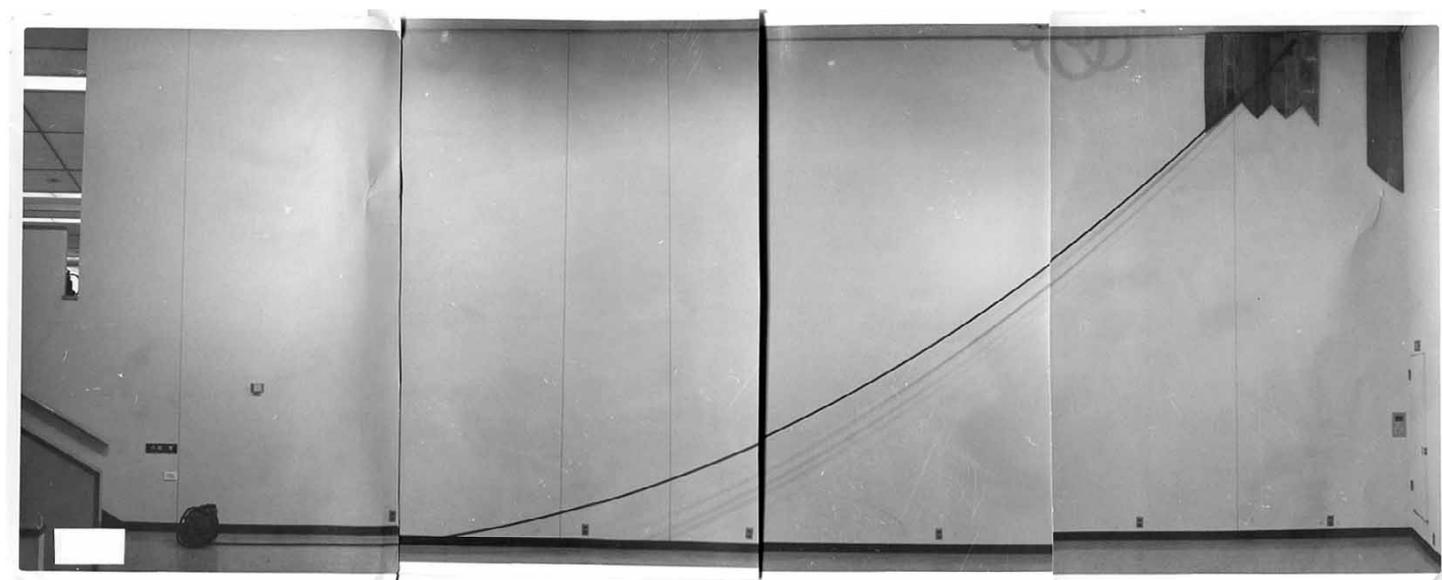
・・・資料23



1978年11月〈今日の作家展/「表現を仕組む」〉横浜市民ギャラリー

長さ20メートルの保育園児用の綱引きのロープをフジの裾野に見立てて、床まで垂れ下がった裾野の下方を大きい庭石で押さえ、上方は高さ5メートルの天井に届かんとする位置に、古い羽目板をフジの頂上に見立てて数枚設置したものにボルトを仕込んでそれに留め、ぶら下げた

・・・資料24



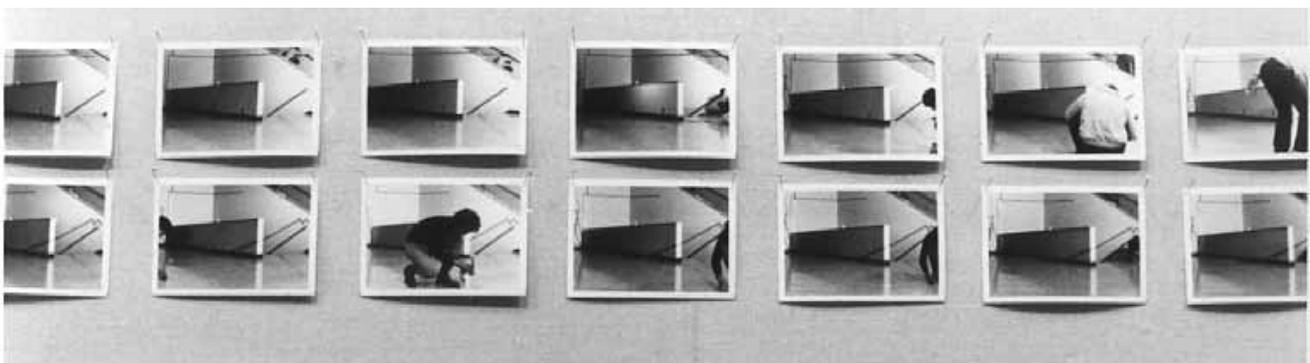
1979年11月〈今日の作家‘79展〉横浜市民ギャラリーでは、美術全集などが入ったスチール製の書架数セットをその蔵書ごとギャラリーの事務室から借り（かなり、嫌がられたが）、ガラス戸の内側に“フジ”の裾野のスロープを、書架外側の側面上方にはW型で頂上を、いずれもガムテープで貼り、“ふれえむにそってはただけのふじ”というタイトルも書架の中に入れ、展示場の壁から30度ほどの角度をつけて斜めに設置した。・・・資料25



また、展覧会初日には観客に参加してもらってのカメラ・パフォーマンスとでも呼ぶべき作業をした。ギャラリーの1.2階吹き抜けになってる階段付近の複雑な場所を選んで、私は、三脚に取り付けた一眼レフのカメラの前ですわっているだけで、観客の一人づつに適当な長さのガムテープを渡しそれをコーナーに貼ってもらうというものだった。私はカメラのファインダーをのぞいて、ガムテープをもった人に「もう少し左」とか、「そこから、右上がりの斜めに貼ってください」というコトバによる指示を出しながら、その都度一枚ずつ写真を撮った。これは、'72・8の〈活躍する僕たち〉展で、やった方法と同じやり方だったが、今回は自分では貼らなかった。結果、完成したものはカメラのファインダーから覗いてみるとファインダーのフレームに沿った矩形の中に、フジの稜線が入ったものなんだが、勿論カメラの位置以外からは、なにがなんだか分からない形で、ガムテープだけが、階段周りの空間の壁や手すりに貼られているということになる。



貼り終わったガムテープを今度は私が、はがし取っていくという行為をし、取り終わった（写真も撮り終わった）とここで、おしまい。早速D. P. E. 店で紙焼きにしてもらって、翌日ギャラリーの壁にもう一つの作品として展示した。タイトルは、“ふれえむにそってはたがとったふじ”。・・・資料26

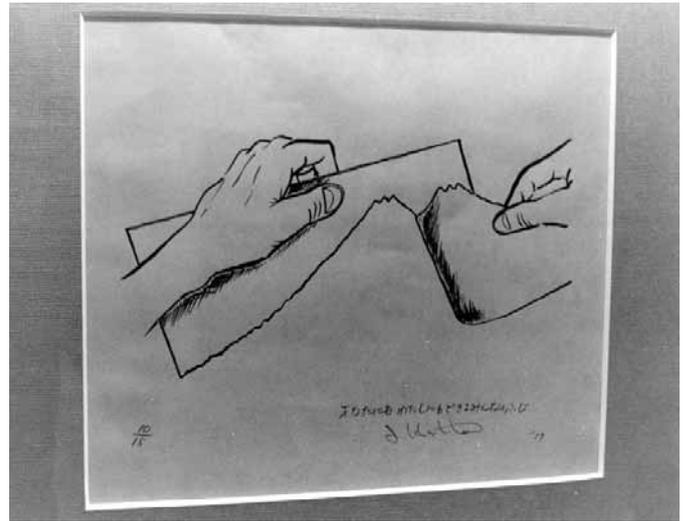


フジが出現してからの自作のタイトルだけを紹介しておく-----

キンギョメイワクナフジ 人間と自然の復権展
東京都立美術館 78・7

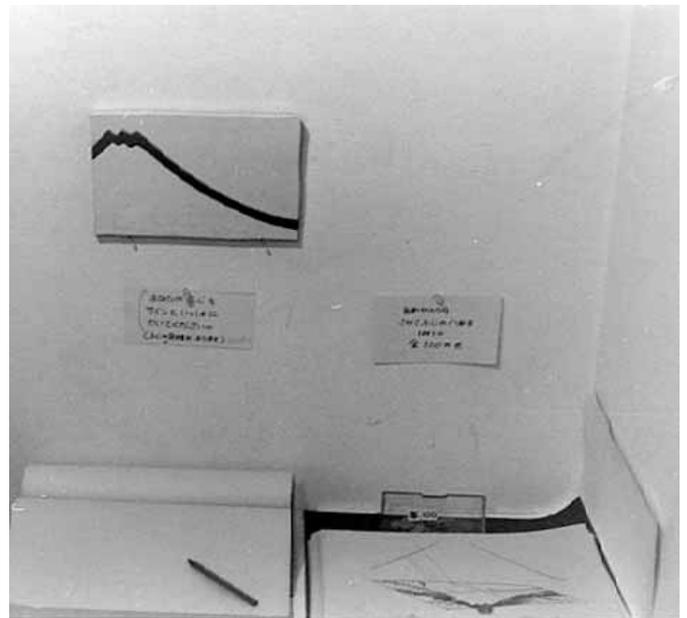
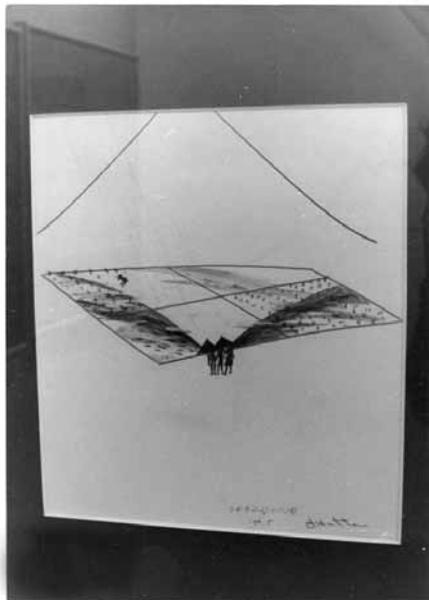
すかあとめくりのふじ 白樺画廊 個展
(東京/銀座) 79・6

あなたにもわたしにもできるみんなのふじ
----シルク・スクリーン作品 同上 資料 27



これでもふじか
-----ワラ半紙にひら仮名を印刷したものを数十枚づつ壁のL字
金具に引っ掛けて展示した。

これでもかふじ 同上 資料 28



ふじの定木

-----板をフジの形に切断して、或る幅を持ったフジの稜線を切り
出す。稜線部分は紅

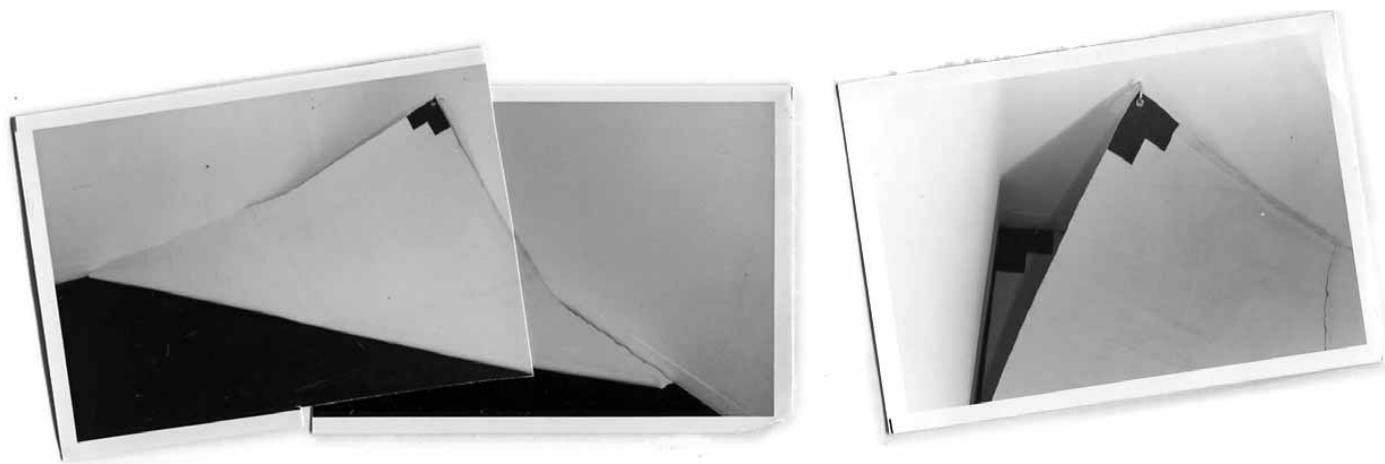
他は、白で塗装。裏面は、逆に稜線を白、他は紅に塗装して、その名を右傾化のふじ/左傾化のふじとした。 同上
さかさふじのはった ----鉛筆ドロ-イング 同上 資料 29

みんなしてひょうりいったいのふじをみよう 神奈川県民ギャラリー - 個展
(横浜) 79・8

ふれえむにそってはったがとったふじ
ふれえむにそってはっただけのふじ 今日の作家 79/横浜市民ギャラリー -
79・11

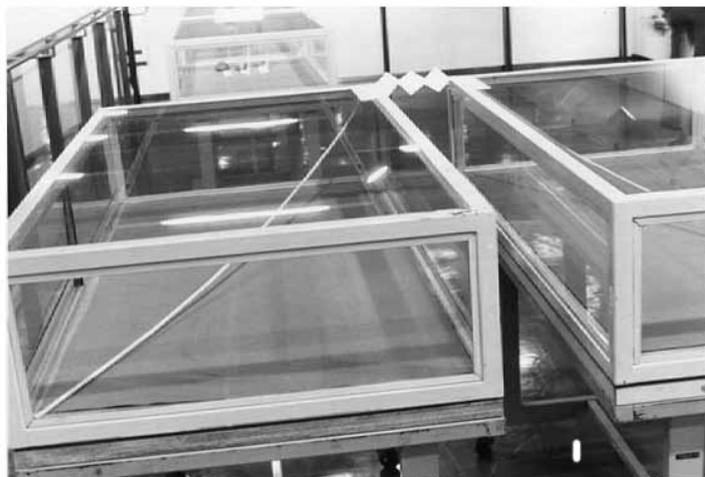
みしんめのふじ
とつぜんのふじ 全部あわせて、「さんみいったいのふじ」
うらがえしのふじ ドロ - イングによる企画/はまのや画廊
(東京/銀座) 80・1

いたばさみのふじ
さんめんろっぴなふじ
すそをかえしたふじ BOX ギャラリー - 個展 (名古屋) 80・6
へそのまがったふじ 資料 30



ケ - ス ・ バイ ・ ケ - ス 神奈川版画アンデパンダン展 神奈川県民ギャラリー -
80・11

. . . . 資料 31





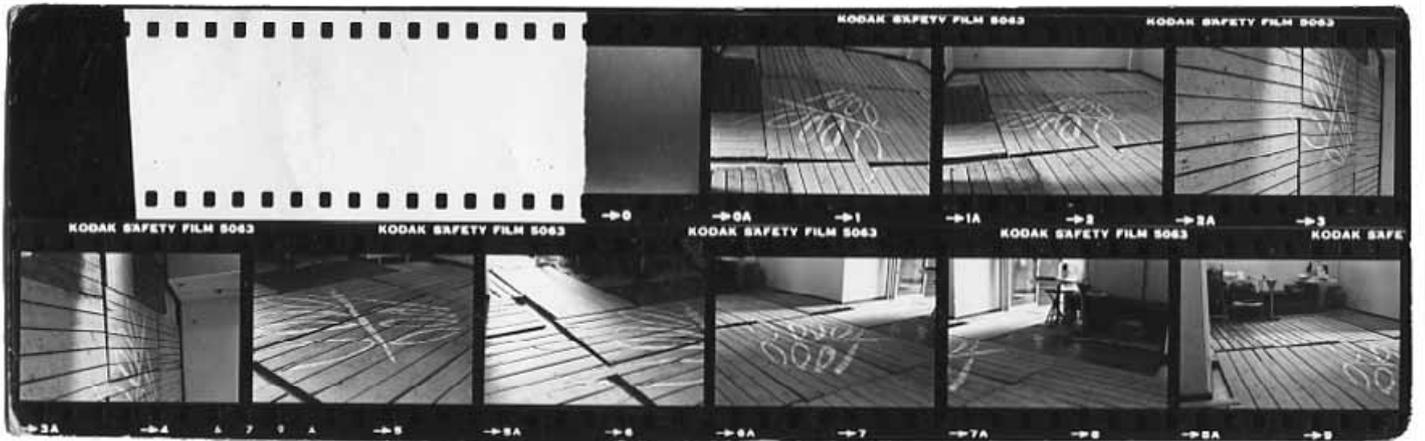
シンポジウムを開き、ジャム・セッションまでやった。
と、同時に「点展」と称し自宅庭でも作品を展示した。

・・・資料 34



翌年、同空間での作品は、当時私の職場だった大田区立Y方中学校で、使い古された渡り廊下や靴箱前の木製のスノコを画廊入り口の外からその空間全体の床に敷き詰め、墨で大描きした10000分のものを、スノコの表面に写し取りノミで浅く彫った。10000分の1000は通分すれば10分の1となるが、ここでは通分せず、10000分の1000全体の形がフジの形に見えるように描いた。

・・・資料 35



スノコに彫った10000分の1000を上から二枚の大判用紙に鉛筆でフロタージュ(こすり出して下の凹凸を上紙などに浮かび上がらせること)し、画廊外側のウインドウ(飾り出窓)に前後の間隔を置いて貼り出した。“萬擦り分の阡擦り”(**)てな具合。



会期半ばには、近所の銭湯から焚きつけに使う廃材の中から、羽目板などの薄い板をリヤカーに満載してもらって来て、スノコの板と板との隙間にその羽目板を差し込んでいくパフォーマンスをやった。・・・資料 37



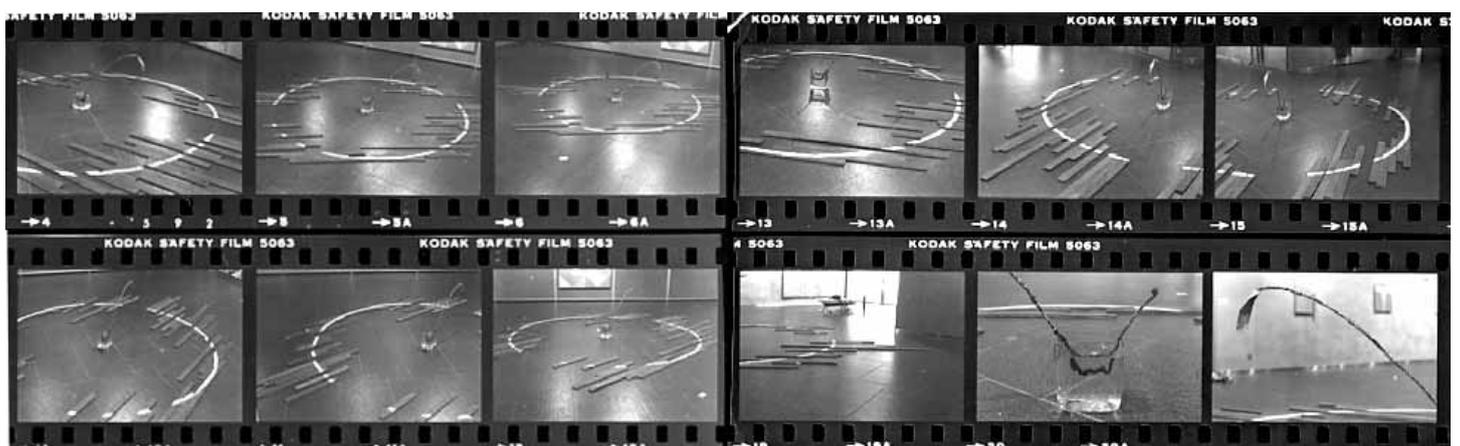
又、毎週末には一人ずつの友人作家をゲストに、私との対談と一般参加者を交えての話し合いをもった。確か榎倉康二がゲストの時だったと思うが、彼のトークの後一般参加者の一人から意見が出された。単刀直入ではなかったが、よくきいてみると、どうやら私がスノコを彫ったことに対する意見だった。いかに使い古されたものとはいえ「公共物に傷をつけて-----」とでもいうべき。

二人称・画廊は私の職場から直線にしておおよそ 400 メートルの距離、画廊から 100 メートル先の東急・池上線の線路から先は、学区という土地柄、私とその地域の公立中学校教員だと名乗るまでもなく、お見通しだった。又、特にこの時期（後に記す作家本人による“書き物 etc.”のいくつかの“中味”に触れて、）根掘り葉掘りの“罪状”を私にかぶせようと躍起になっていた政治性党派もなぜか？あったことを覚えている。

この時は、当然この土地柄この様な一般参加者からの意見も出るだろうということを見越しての作品表現であったし、“廃棄処分寸前のものだが、もう一度学校に戻す”と私が云った後は、それ以上の話にはならなかったが、公共物にはちがいない。と、同時に公共物とはなにか？ということも問題である。

だから、同年 10 月の〈自在と自製の空間展〉代々木アート・ギャラリー（東京）では、建てかえのため壊された同中学校の体育館の床にペイントされた、バスケット・ボールのフリースロー・サークルのライン部分を拾い集めて、少々歯抜け状態ではあるが、展覧会場床に敷き直し、その円形ラインで囲まれた中央には針金フジに昆布を巻きつけて逆さフジの状態の水で薄めた酢を入れたガラスの角型水槽の中に浸かるように展示した。

・・・資料 38



(**) この“せんずりふじ”は同年2月の〈雪の高田のメール・アート・フェスティバル〉大島画廊（新潟/上越）にも小品を送り、出品したし、1984年6月の〈白色変移〉のPLAN Bでのパフォーマンスにも、用いた。木版画用の版木に10000分の1000のフジ形をレリーフ状に浮き彫りして完成させ、今度は彫刻刀の平刀で、元の平板な版木の状態になるまで、徐々に平らにしていくその全過程を、36枚のフィルムに撮影し、キュウリ一本を包丁でスライスしていく断面を同様に撮影したもの、それに金太郎飴の切り口をそれぞれ撮ったものの3本を3台のスライド映写用のプロジェクターで、同時に壁にそれぞれ36カットを映写完了させ、次にはそれを逆に36カット目から最初のカットまでをレコード・プレーヤーにかけたLPレコードの曲今田 勝セブントット+ONEの♪MORNING DANCEにあわせて、私自ら踊り(?)ながらプロジェクターのリモコンを操作し映写した。終了後、「こんな恥ずかしい想いをしたのは初めてだ!」とは、以前の友人の作家、G嬢のコトバ。

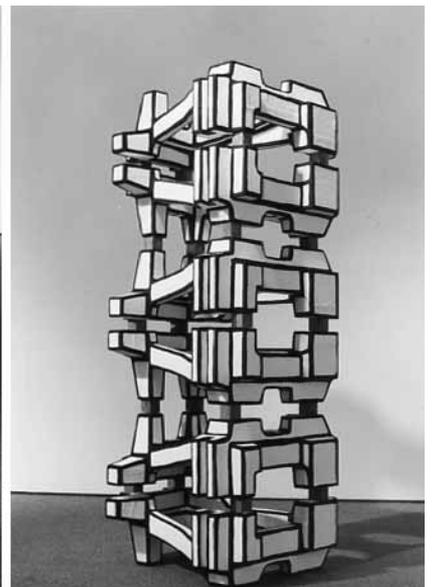
ゴミと作品とは紙一重の差とは彫刻の森に関して記した通りだが、通常ゴミとして捨てられていた物質でやっかいなシロモノがあった。

カメラや家電などの保管・流通に際し、本体を保護するためのクッションとしての梱包材である発泡スチロール製のパッキングだった。発泡スチロールという、ハリウッドの撮影用大型セットの材質として開発された物質そのものは、私にとって、学生時代のディスプレイ関係のアルバイトで、T島屋のバラのレリーフを渡された包丁一本でけずり彫った経験はあったが、この雌型としての形（これには経済性・強度性それにこの雌型を作る際にもう一つの型からの抜けの良し悪しなど云々の効率性などからさまざまな凹凸がつけられていてとても一筋縄ではいきそうもない白いものだった。）を只、ゴミとして捨てるにはしのびなく、皆が邪魔で捨ててしまった物を持ち帰っ

ては（といってもアトリエもない自宅へではなく、仕事場がわりに使用していた職場の準備室へではあったが）それにこれ又、使い古した職場のカーテンの綿の布地を木工用ボンドでその凹凸すべて貼りつくし、下地塗料を塗って画布化させ、全体を白に近いクリーム色などの明るい色の塗料を塗り、その型のすべての稜線を筆でなぞり黒に近いセピア色などの暗い色でペイントするという作業をはじめた。

この作業のはじまりの段階の作品を1988年5月INAXギャラリー（東京/京橋）で発表した。

・・・資料39

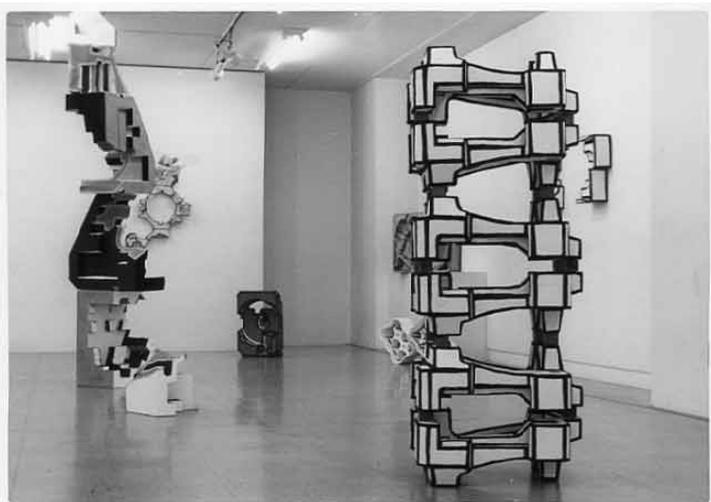
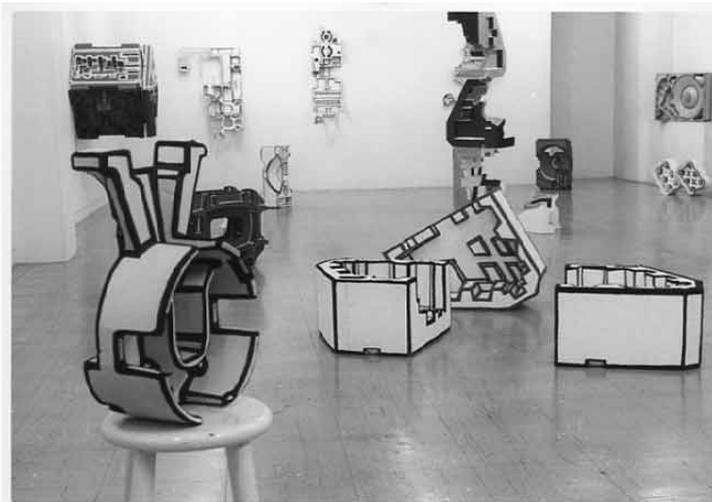


オブジェとしての型のひとつひとつの背や、底（壁面や床面との接点）には、まだプリクラは出現していなかったが、シール・プリントにフジの形に焼き込んだ The Manhattan Gomitorin Project の文字を貼ったのだが、これは内緒。

又、この個展のリーフ・レットに“隈取られて立体”のタイトルで文章を書いた、“展” DIRECTOR の核になる、美術評論家の中原 佑介氏は、ゲラ刷りの文末に次のような一節を（八についてのダジャレに埋没している八田 淳へ。

「²八⁵田¹¹淳¹⁰展、⁸型・¹²隈取り」というタイトルは、「二八画、二八画」というように八をダブらせてあります。念のためと、括弧に囲んで示したが、本編では、カットされていた。-----これも内緒のコト。

翌年2月には同作品+その後の展開作品による個展を ギャラリー16（京都）でもち、・・・資料40



同年1989年12月には、かわさき IBM 市民文化ギャラリー（神奈川/川崎）での片江 政敏との二人展へとつづくのであった。・・・資料41



私事だが、1990年3月に自ら16年の公務員職を辞した。ここにはたった1年しかいなかった最後の職場（大田区立K塚中学校）の教材置き場と化した空き教室の棚の上にこれまでの発泡スチロール製の作品群を大型ダンボール箱に入れ、約30箱分をそっと置いて出た。「現在、アトリエを物色中です。それまでの間置かせてください。」の貼り紙をして……。数か月後、私的理理由からそれまでの自宅を出るハメになり、最後の職場からそれほど遠くない六畳一間にKが生えたような狭いアパート住まいの、私の処を一人の若い教員が訪れ、「センセイ（もう辞めるのにまだこう呼ぶ）あれ、どうしましょう？時々職員会議で話題になるんですが……」「ここに置けると思う？もう少し待ってよ！それでもダメなら捨ててください」「捨てるなんて・・・売れば高いんでしょ？」とかのやり取りはあったが……。それからすでに10年余。とうの昔に元のゴミと成り果ててしまったようである。元々とても邪魔なゴミとして捨てられていた物質は、その後一時期、作品という粉飾に彩られはしたが、詰まるところはゴミだった。作品時代にお買い上げ頂いた方々には、多々感謝！

しかし、1990年11月から3か月の船旅での寄港地は、経済的にはまだまだ貧しい「発展途上の国々」が多かったせい、これらのパッキングはゴミどころか貴重品扱いで、特別のことでない限り型として完全な全体などは手に入らず、寄港地ごとにゴミ箱をあさっては型のカケラのようなものを船に持ち帰り、きれいに洗ってその表面に現地で購入したその日の新聞紙をその記事内容とともに貼りこみながら地球を一回りした。

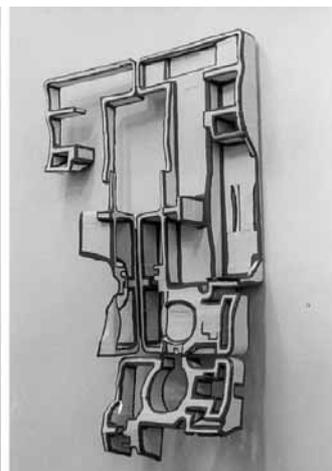
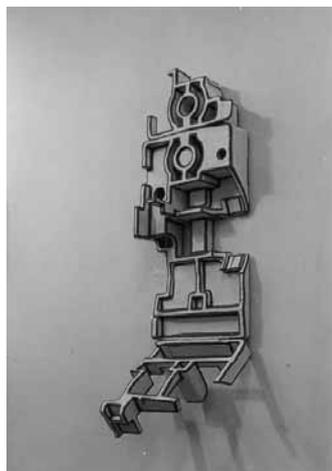
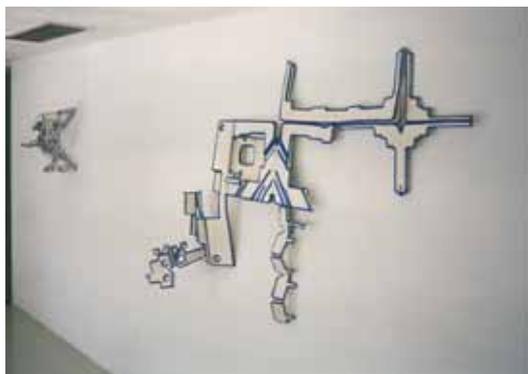
1991年5月 倉重光則との〈二人展〉藍画廊（東京/京橋）で発表。・・・資料42



形式をかえて同様のものを同年11月の〈POINT NOW '91〉横浜市民ギャラリーでも展示した。・・・資料43



その後も狭いアトリエ兼ねぐらの中で、作り続け、1992年・1993年の7月から8月にかけての二つの信州での野外展に出品、1994年10月の名栗湖（埼玉）での国際野外展にも出品し、1995年1月 ときわ画廊（東京/日本橋）での個展・・・資料44 を経て同年8月 ギャラリー檜（東京/銀座）の個展に至る。



‘93年 木曽の野外展での作品と、’94年 名栗湖の野外展での作品とは元々一つの発泡スチロール製の（雌型）パッキングだった。

●それを手製大型熱線で二箇所に取り込みを入れて切断面を左右に観音開きを開いて接着した。それと、開いた面の裏側を半円状に切り抜いた。

●これら、二つの塊りの表面全てに綿布を貼り、油彩でペインティングした。

●型の稜線部分は、白の油絵の具をペインティング・ナイフで盛り上げて縁取りした。

木曽では“color blind in the moonlight”とタイトルをつけ、2本の赤松の間にロープで吊り下げ設置した。

・・・資料 45

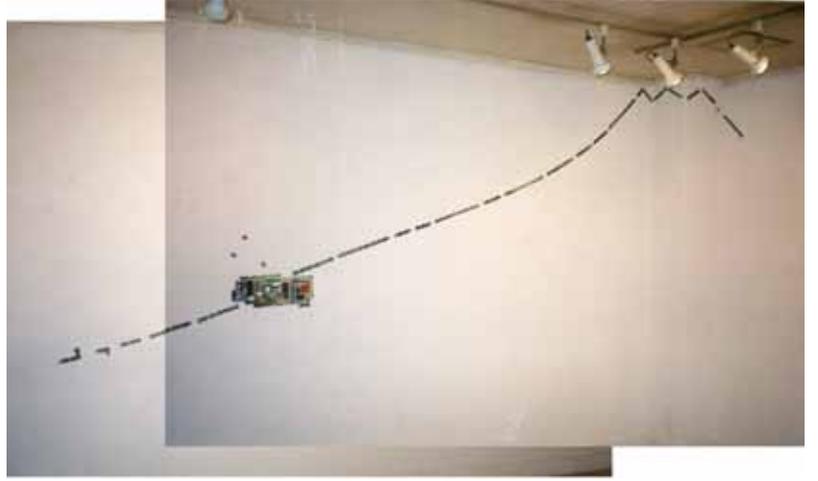
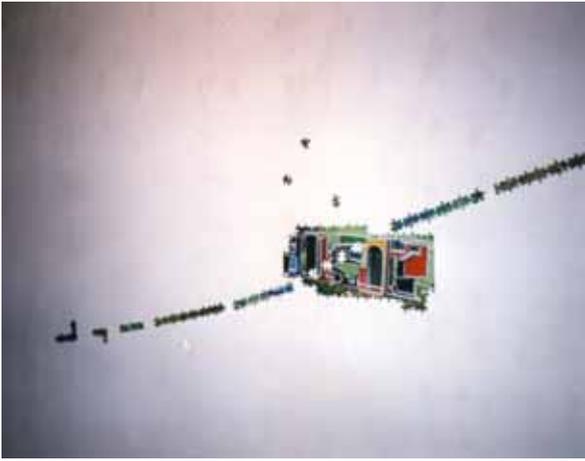


20年に一度作り替えを繰り返し繰り返し行なっている伊勢神宮の遷宮用材檜の御用林がこの付近にあるときく。

又、名栗湖では、白のビニールでコーティングされた太めの針金でフジをつくり油彩された発泡スチロールの塊りを結わえて、湖の周縁道路のカーヴ・ミラー上部にまるで落し物でもあるかのようにひっそりと、取り付けた。タイトルも、“もの忘れ・忘れもの”。

・・・資料 46

彩の国のこの国際展には、特に韓国から多数の若い作家たちが参加した。



元々梱包材として、一つの塊りだった素材を2つの塊りに分離し、別々の空間で展示した後1995年8月 ギャラリー檜（東京/銀座）の個展で再び同じ空間の壁に展示した。‘93年と’94年の両野外展での作品展示現場のカラー写真を、それぞれ大判のジグソー・パズル仕立てにつくり、写真の中の作品本体の周りの風景部分を、全部バラバラにしてフジの線形に並び替え、写真に写った作品本体の真ん中を、線形に並び替えられたジグソー・パズルのコマによるフジの裾野が、斜めに通るようにした。
 ・・・・資料47

又、作品本体としての二つの塊りは、その支持体である発泡スチロールを全部取り除き、表面の油彩された布の部分を作り開いて平面化し、壁に画鋏で留めた。
 ・・・・資料48



1997年4月 真木・田村画廊 での個展ではじめて、‘90年の船旅以来描き続けている鉛筆による風景ドローイングを、画廊の壁3分の2に目一杯貼りめぐらせた。一番奥の壁には、左下から斜め右上方にかけて、そのとなりの壁には、左上方から斜め右下へ、画用紙に描いたドローイングをもう一度上からトレーシング・ペーパーになぞって描き出したものをそれらのドローイングの上から貼った。

このドローイングのなぞりは二箇所の壁を使い展示会の事前にやったものだ。二箇所とは、片方は以前巣鴨プリズンだった場所。現在は東池袋サンシャインビル奥の展示会場となっている処。もう一方は、私の出身高校、下鴨にある京都府立洛北高校（旧 京都府立一中）の校舎内廊下の壁。

画廊の壁面残り3分の1には、トレーシング・ペーパーになぞった鉛筆の線を再度白く細長い用紙に転じ、緑色のオイル・スティックを使って線描したもの。それを、植物の茎に見立て、大輪の花に見立てた画廊の出入り口の空間を取り囲む両脇の壁に、円形に貼ったクレパスで描いた花の絵の数々（京急・蒲田付近のN病院のデイ・ケアの患者さんたちと共にここ10年ばかり花の絵を描き続けている。）

大輪の花のほぼ中心の壁際には、私が13歳の頃に初めて描いた油彩の花の絵を、やはり同年自分で彫って作った木彫の額に入れ展示した。これらの旧作は中学1年生の夏休みの自由課題のものだった。

・・・資料49



床には大小2台のカセット・テープ・レコーダーを置き、親亀の背中に子亀を乗せた状態にして、それぞれの電源コードを異なる二方の壁にあるコンセントから一本づつ引いた。

これは、1970年12月 同じ場所ではなかったが、同画廊での個展の際やった日替わりインスタレーション（当時、まだこの言葉は一般的ではなかったが・・・）とでも云うべき展示設営物のひとつで、互いに向かい合う壁下にある別々のコンセントに一本の電気コードの両端につけたプラグを差し込んで、置くといったものがあった。それへのオマージュとでもいうべきものだ。

2台のカセット・レコーダーには、それぞれ別々の音（人たちとの歓談 etc.33/小鳥・動物の声、寺院の鐘、祈りの声 etc.37/街、市場、公園 etc.の音 60/コンサート、ライブ・ハウス、サーカスの音 etc.32/ 会合 etc.の音、話し 14/乗り物、駅、港、空港、波止場 etc.の音・アナウンス 38/ラジオ、TV.の音 77/録音、記録 etc.の音 156/日本の曲、歌 254/外国の曲、歌 291 全音数 1000）を入れ、音をダブらせたり、交叉させたりという具合にテープを作動し続けた。

・・・資料50



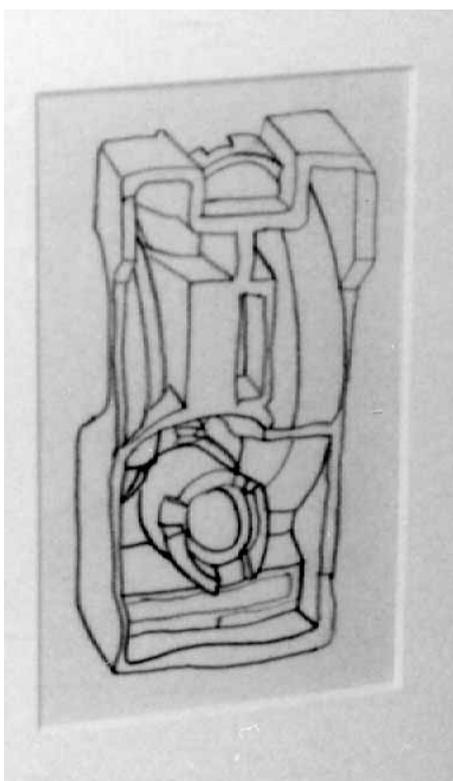
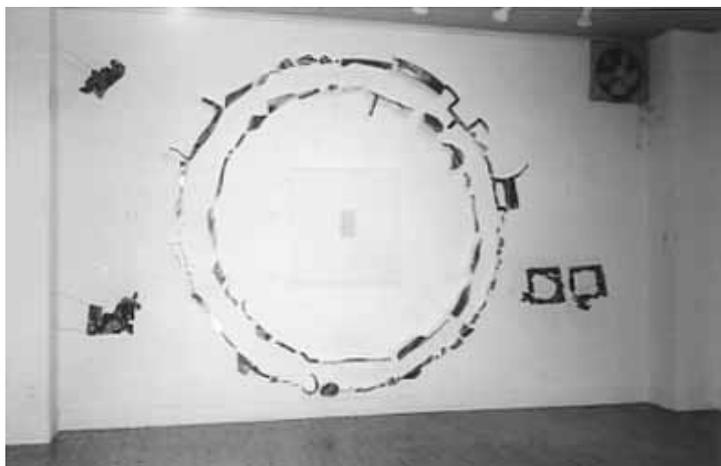
1999年1月、ギャラリー檜で長 重之と二人展をもつ。

私が学生だった年の1996年の旧作(ブドウ・リンゴ・パン・玉ネギと背の高い陶製のワイン・ボトル・アルコール・ランプを、縦長の手作り木製パネルに油彩で描いたもの)パネルの裏側に青い布を袋張りし画廊空間の奥のコーナーから45度の角度をもって油彩パネルを逆向きにして、床に直接立てた

青い布にはパネル上部からぶら下げた調理用のステンレス製の大型“お玉”のふくらんだ方に

“フジ借形”（後で述べる）の写真の縮小カラー・コピーの一部をちょこんと貼り付け、凸面の鏡面に歪んだ形で映り込むようにした。1966年完成時、画面最上部に1966と私の名前を英語表記したサインが逆さに置かれたの

で、66 がひっくり返って 99 に、その前に 19 を付け加え再びサインもした。
床に最も近い奥のコーナーからこのパネルの下方をかすめてこのコーナーに対向する天井に最も近い一角まで、画廊の空間を対角線状(斜め)に緩やかなカーブを描くように綿製ロープを張った。
縁日のかき氷屋で使用する、千鳥模様の入った氷印の小旗をこのロープの上部にねじり鉢巻よろしく巻きつけて定番フジの頂きの様に三峰に折り曲げて固定した。
壁面用作品 2 点。1 点は額装したマルチ 16 のニコシア(キプロス)の軍事境界線近くの ‘ フジ借形 ‘ 写真を、マット紙(不規則な位置に大中小の矩形を数箇所カットし、窓を開けたもの)で押さえたもの。
もう 1 点は、長方形の大型卓袱台を裏返しにして壁に固定し、その裏面にマラッカ海峡と地球一周を乗船した客船のマルチ 16 ‘ フジ借形 ‘ 写真を貼ったもの。
時代を 10 年戻して、1989 年 2 月同ギャラリーでの三人展(中川久・沙羅 愛との)。
新聞広告の乗用車の写真を切り抜く作業をこの頃毎日のようにやっていた、かなりの量がたまっていた。 又、発砲スチロールの型を鉛筆でドローイングしたのも数多くあった。
この鉛筆ドローイングをもとに、線で区切られた面の一つ一つを拡大コピーしその型を厚手のスチレン・ボードに写し取って切り抜き、表面には新聞の乗用車広告写真の切抜きを貼りこみ、壁面中央には、発砲スチロールの型を小さくドローイングしたものを額装して取り付け、そのドローイングの額を中心にして大きい円形になるように型抜きしたスチレンボードを貼っていった。…別資料



2001年6～7月 MUZEUL DE ARTA BRAȘOV 個展（ルーマニア/ブラショフ市）

なぜここで？ということになると、ハナシを10年余り遡らせなければならない。1991年1月ギリシャのピレウス港に3ヶ月の船の旅を終えて帰港した私は、帰国までの数日間を利用して、C.ブランクーシの三つのモニュメントがある公園へ行きたいと思った。それがどこにあるのかも知らずに、とりあえず北の方に行けばなんとかなるだろうといった安易さで、誰かに訊けばわかるだろうといった無謀さで、アテネから北へ向かう国際列車に乗った。自分のコトバの出来なさなど一斉頓着せず、質問の意味がつかっていないんだかいないんだか、案の定誰に訊いても分かるわけは無く、当時まだユーゴスラヴィアだったマケドニアの首都スコピエまで行って引き返してきた。そんなわけで、その公園のある町はルーマニアのティルグ ジウというところだと、帰国後ようやく分かり、念願のその地を訪れたのは1996年が初めてだった。

その時、ウクライナとの国境の町シゲットマルマツィエイで泊まるべき安ホテルが無く困ったなと思っていた矢先、「良かったら、家へ来ないか？」と、英語のできる若い女性の通訳の助けを借り、誘ってくれた四十過ぎの夫婦がいた。その後の一人娘結婚、初孫男児誕生と死、再び、孫娘誕生と目まぐるしく時はすぎたが、今に至るまで、家族ぐるみ、近所ぐるみ、親戚ぐるみ、の付き合いはつづいている。

マラムレシュ地方なまりのルーマニア語しか話さない友達になった夫婦はじめみんなに、私もブローケン英語に擬態語・擬音語とジェスチャーで、十分過ぎるほど楽しめたけれど、やはりコトバは必要だと、武蔵野市でルーマニア言語講座をやっているのを知り、武蔵野市がブラショフ市と、交流していることも知った。武蔵野・ブラショフ市民の会にも入り(2003年4月に脱会)、初めてブラショフ市を訪れたのは1998年だった。日本に対する興味がとても強く、日本語を学んでいる若者たちが多いのに驚いた。

いつしか、ブラショフで展覧会をしたいと思うようになり、2000年夏再びここを訪れた際、直接 美術館の館長にあって、その地で描いたドローイングを並べて見せ、針金フジの写真とともに、この美術館で是非個展を開きたいと申し出た。その結果、「よし！やろう」ということになり、紆余曲折はあったものの、色々な人のお世話にもなり、この個展にこぎつけた次第。

手作りのポスターを街中に貼りまわり、案内のビラを広場や公園で市民に配り、美術館1階の広い三部屋をぐるっと一回りするよう大型の木製のパネルを繋ぎ合わせて、臨時の壁面を業者に頼んで作ってもらった。手作りのリーフレットも私の書いた日本語の文章を、当時東京外大に留学中だった、ルーマニア人の友人に訳してもらい、作品の展示の為に作業は日本語を学んでいる若者たちが手伝ってくれ、ヴェルニサージュ（オープニング・セレモニー）の通訳も友人のブラショフの大学生にやってもらった。・・・資料51



2002年 9月～10月 かわさき I. B. M. 市民ギャラリー(川崎市)と、スペース 23℃(世田谷区) で同時個展を開催。1990年の地球一周の船旅以来、2002年までに世界の各地で描きためた鉛筆によるドローイングと、同じく世界各国(各地方)の風景の中に針金を折り曲げてつくったフジを入れて撮った写真を展示した。この、鉛筆ドローイングを《素旅素描》、針金フジの写真を《ふじ借形》と、名づけた。ちなみに、前者を、Drawing On The Earth 後者を Fuji Around The World と英訳したが、日本語の控え目さにくらべ、こちらは、かなり大袈裟か？市民ギャラリーでは、大小とりまぜて、数十点のドローイングを壁面と床に、六つ切りに伸ばした写真約 250 点を床から壁そして天井・ガラス・ウインドウに貼ったり、置いたりした。……資料 52





スペース23℃では、A0のダンボール紙に、平かなで八つの文字、なにもなくはないを縦に、カッター・ナイフで切り抜き、抜かれたダンボール紙をガラス戸側の狭い壁に貼った。他の三方の壁をぐるりと一回りして全体がフジに見えるようにその裾野から頂上部分また、裾野へと、ダンボール紙を継ぎ足してフジのアウトラインの切れ目を入れていった。その切れ目を少しだけ離して、やや、太くひろがったフジのアウトラインには、ダンボール紙の裏側から世界の針金フジの写真を貼り込んでいった。・・・資料53

切り取ったダンボールの文字 なにもなくはない を横位置にガラス戸に貼り付けて、これはおしまい。私のフジのはじまりは、1975年の〈アート・コア8月展〉・・・資料17だったが、この数人の作家による連続個展、私の次が榎倉康二展だった。1996年秋、同区内の奥沢から、ここ中町に転居準備中、52歳の若さで突然亡くなった彼がアトリエとして使用するつもりだった部屋をギャラリー・スペースに転用したスペース23℃、での今回の私の作品は、友人でもあった榎倉康二への、レクイエム(鎮魂)と私の最初のフジへの一人オマージュ(賛歌)をかねたものだった。これとは別に、海が描かれている世界各地のドローイングを次々に並べ、それらに共通する水平線が繋がって見えるようにフジの下方の壁に貼っていった。天井には、ヨコハマ国際花火大会の花火に針金フジを写し込んだ《ふじ借形》を大きい円状に二重三重に貼り、その内側をスエズ運河での船べりと運河の水とフジとの写真を繋ぎ合わせて円形にした。・・・資料54



2005年6月 gallery ganglion(東京・恵比寿) でこの鼎談者の一人でもある篠田孝敏氏のプロデュース人選による多人数展『六月の釣り人』に出品する。
2001 年ルーマニアのクライオーヴァの夏季大学(ルーマニア語と近代彫刻の祖ともいわれ称されるC. ブランクーシを軸にしたルーマニアの文化が中心)で学んだ古い大学の窓と針金フジを大きい紙に不透明水彩絵の具とクレパスで、現地制作したものを天井から吊り下げ(これは 2001 年のブラショフでの個展に出品した)、床にはポリプロピレン製の荷紐(ビニール紐)を束にしたものを壁から半円状に置いて固定し、半円の基点となる壁の下方には横長の鏡をセットして、半円をすこしずらして映し込んだ。・・・・資料 55

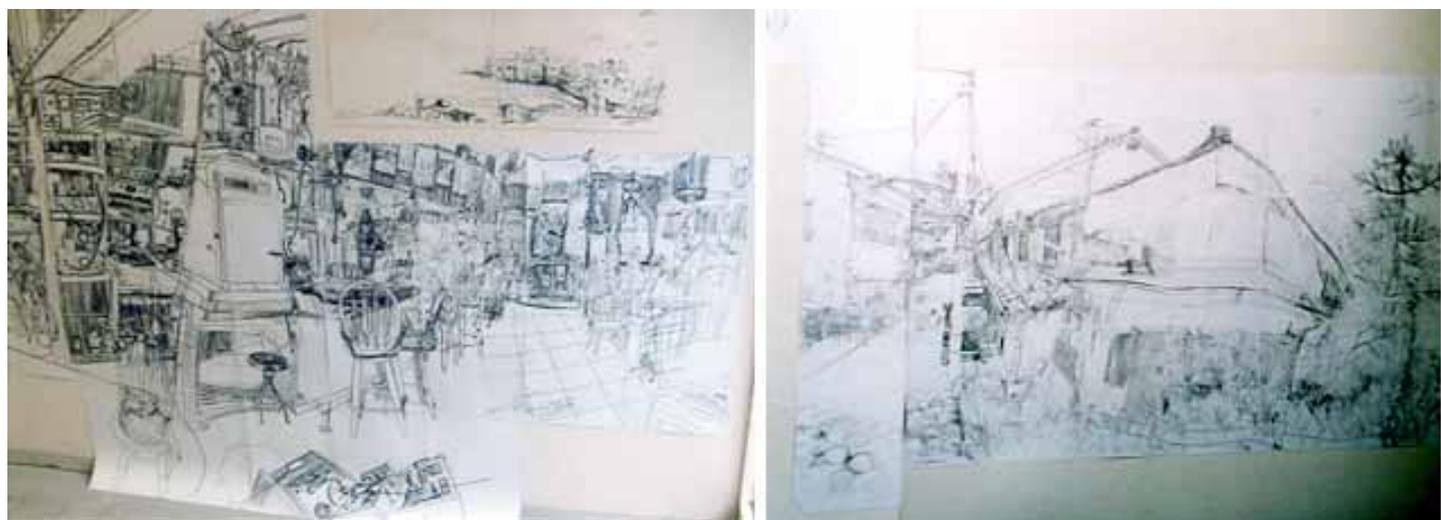


2006年3月 個展を京都で開く。 Gallery Space ○△□

前年秋、京都は東山三条下ル 知恩院の古門前、白川沿いに連日通って描いた鉛筆でのドローイング(B4の画用紙77枚をタテ・ヨコに繋ぎあわせてひとつの大きい風景画となったもの)を、此の間、通りがかりに気にかけていた近くの画廊の二階床に並べて、ギャラリーのオーナーに見てもらった。彼女とは、それまで面識は無かった。「この空間と、立地条件がとても気に入ったので是非ここで個展をやりたい」旨、伝え返事を待つ。

翌年1月半ば過ぎ、「3月末でよければ、やりましょう」とのOKをもらった。

鉛筆ドローイングの作品(世界各地を旅し描くようになってこのかた、バック・パックの中に収まり具合がいい B4 サイズのスケッチ・ブックを常に使用し、紙を繋いで大きなドローイングになるようにしている)は6メートル×3メートルの大きいものから、画用紙一枚の小さなものまで、28点を、壁面はもとより、床・天井にまで延長させて貼りめぐらせた。片や針金フジの写真作品は、額装したものを9点壁面にある柱の出っ張り部分の脇に床から天井へと貼り並べたりしたインスタレーション風のもの等とりまぜて展示した。・・・資料 56



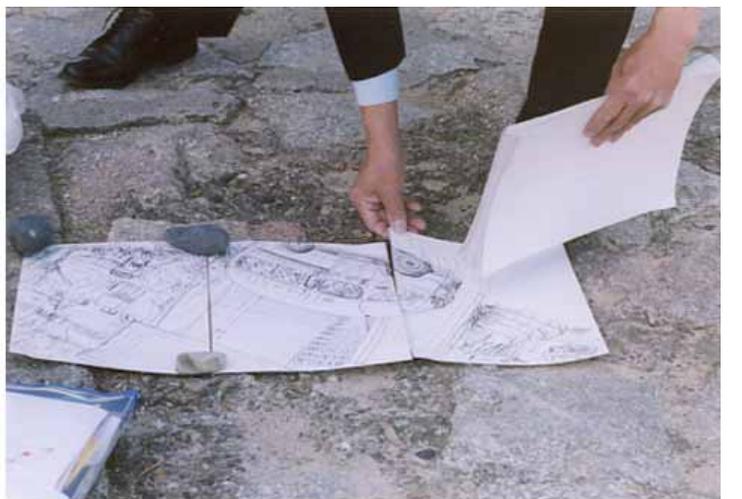
2002 年秋の スペース 23°C(東京・世田谷)の天井にくりひろげたスエズ運河('91)と、ヨコハマ国際花火大会('00)での針金フジ写真をここでは、再度床上に展開した。円形に並べて置かれた写真の中心には、B4判紙に描かれた鉛筆ドロ잉の束を半透明のソフト・ケースの中に入れて五寸釘で床あげしたスチレン・ボードの台の上に置き、天井から魚釣り用の「回転ゆり戻し」の両端に同様のケース入りドロ잉の束をぶら下げ、常にゆるやかな回転運動をするようにした。・・・資料 57



会場では、2002 年秋の兩個展会場でのものと同様の(と、いっても音源は、以前のカセット・テープから C.D. に変わったが)音楽を鳴らした。(146 曲)

画廊の天井からぶら下がって回っていた、二つのドロ잉の束を解き、会期半ばの土曜の午後、三条大橋西詰・鴨の河原で紙を並べるパフォーマンスをした。・・・資料 58





バック・グラウンドには、イタリア映画「イル・ポスティーノ」の主題曲を流しつつ・

鴨川の上流は、加茂川と高野川という二つの流れがあるが、それぞれの上流の雲ヶ畑と八瀬の先で拾い集めておいた小石を重しにし、風で紙が飛ばされないようにした。雲ヶ畑と三条大橋は、1969年私の最初の個展の地でもあった。加茂川と高野川は下鴨神社につながる糺の森の南辺りで、合流し鴨川となるが、重しにした小石の一部に、世界各地での針金フジの写真を縮小カラー・コピーしたものを貼り込んでおいた。それらを、二つの川、もしくはフジの左右の稜線に見立てて、置いたが、ほとんどその効果は無かった。

尚、作品以外にも、私の発表に関するありとあらゆる資料を、画廊の片隅に置いた。1970年に一年間だけ勤務した。N彩工芸社での先輩F井氏(現在は京都造形芸大教授)がこれらを見て曰く、「人生全部持って来たんやねえ」

今回、私の作品発表歴には私が出品・参加したすべての展覧会を網羅した。……つもりだったが、2~3抜け落ちていたので蛇足のシッポみただけけど、付け加えておく。

‘92年1~2月 京王/井の頭線、池の上駅近くの喫茶「さかもと」にて、〈八田 淳のスケッチ展〉と銘打って展示をした。’90年~‘91年にかけての船旅の時描いたものを中心に喫茶店の壁全面に貼りめぐらせた。又、’92年4月、春先ツツジの花の満開の頃、群馬の館林市三の丸芸術ホールでの多人数展に参加した。

●発泡スチロール製のパッキングの型からかけら程の形を切り出し、それに布を貼りペインティングのための下塗りだけを施したもの。

●上記のものと同じ形を白のビニールでコーティングされた針金で型取ってつくったもの。

●それら、二つの同形のものの、それぞれ異なる方向から見た形を同じ平面上にダブらせて二色の色鉛筆で線描きしたもの。

壁のコーナーに渡した木製の少し曲線気味の棒(この棒には布が貼ってあり白く塗装されている)にこれら3点を、一つは引っ掛け、一つは棒の上に置き、ドロイングは壁と壁の間に留めた。

この小品は、それが作られた時点ではもうすではじまっていたが、その後もつづく旅先での針金フジや、鉛筆ドロイングによる風景写真・風景描写への、より確かな変節になったものだと思う。

……資料 59



年代はさかのぼるが、‘80年台半ば近くに、京都のギャラリー射手座での多人数展にも、画廊壁のワン・コーナーを使い、多数の釘にタコ糸のような太めの糸をからませながら、10000分の1000をフジ状に作り設営した。

又、「軽美術のタベ」と称してPLAN B(東京/中野)で〈軽美術協会 旗揚げ興行〉を華々しくやった。♪ハッタッタハタッタと♪はとポッポのメロディとともに、少年時代いらい久々に足にしたローラー・スケートを駆使して、といってもドタドタと板張りの会場に大き目の旗状の白布をかかげながら滑り出し、スライド・プロジェクターでスクリーンがわりの白布にモノクロームの連続写真を映写した。

●マンガの吹き出しが登場。

●セリフが登場。→「ああ」→「アア これなのね」→「これだったんだわ」

→「いいわね」→「軽美術の旗って」

●セリフが変わるに従って、吹き出しの形も徐々に変化し、最後の軽美術の旗ってのセリフはほぼ、円形に近い吹き出しの中におさまって、完全な円形の中に、次のセリフが入る。

●白地に白く何にも染めぬア~ア面白くない軽美術の旗は

この興行は確か80年頃だったと記憶しているが(‘83年5月)、このすぐ後HIKARUGENJIというアイドル・グループがローラー・スケートで登場し、歌い回った。このタベには、鼎談氏の残る一人 高島 直之氏がお客として参加していたが、スライド上映後、これからのタベの宴だというのに何故か中座してしまった。

そして、2002年の5月~6月 武蔵野市にある三ヶ所の施設(境南/中央/南町の各コミュニティーセンター)で、鉛筆によるドロイングと針金フジの写真の展示をした。

これは、昨年、私が個展を開いたルーマニアのブラショフ市と武蔵野市との交流が始まって以来、今年が丁度10年目という節目になる年でもあり、ブラショフから招聘した3人のルーマニア人によるルーマニアの言語講座を

もつヶ月の期間、そして、ルーマニア関連のシンポジウムや料理講習会等の催しも含め、ルーマニア・フェアの一環として、特にここでは、ルーマニア関係の写真と素描だけを急ぎよ展示することにした。

時代はずっと遡って、1972年9月～11月 京王・井の頭線の駒場東大前という駅に現在はなっているが、当時は駒場と東大前という極、至近距離にある二駅だった。この駒場駅の南に舞踏家 邦千谷が主宰する舞踏研究所があった。昼間は私立の幼稚園として機能していたその場で、邦千谷を中心とする舞踏家たち赤土類・辻村和子らと、美術家の風倉匠・呉埜孔それに雅子(柴田)&尚嘉(彦坂)のユニットと、共に 『駒場アンソロジー』と称したイベントの宵をもつ。

・・・確か毎木曜日の夕刻からだったように記憶する。

2004年10月22日 赤土類に久しぶりに会った際、『駒場アンソロジー』のメンバーにふれて、呉埜孔は本名クスノ・タカオといい、夕張三兄弟の末弟で、サンパウロ在だったが、2001年に亡くなったことを知らされた。又、風倉匠は、2007年11月13日 逝去。

- ◎ 天井から空間に吊り下げた二本の細い紐を交互に引くと、紐の根元につけられた ART と切り抜かれた厚紙文字が、ギクシャクしながら当時流行っていたTV番組のピンポンパン体操の曲に合わせて上昇していくといったもの

幼稚園&舞踏研究所としての、現場に設置されていた床から天井近くまでの大鏡にガムテープを縦に貼っていき、ほとんど鏡面全体を覆った後、今度は貼られたガムテープをそのテープの幅で横方向に切れ目を入れ左右に剥がしていくと、剥がされた部分から鏡面に映る像が復活していくといったもの。 など毎回、手を替え品を替えた行為をした。・・・が生憎、記録が手元に何もない。

2007年9月 前年に引き続き、京都での個展。

会場は、河原町蛸薬師下ル東にある老舗のギャラリー・マロニエ

壁面が縦横共に大きく空間も広い五階の会場である。

入口より右手前方の壁面には、『島の新しい寺院』

‘06・12 (タイ・サムイ島 65 枚タテ 2,590 mmヨコ 5,200 mm) と、

『多田神社』 ‘03・6 (東京・中野区 55 枚タテ 2,590 mmヨコ 5,200 mm)

<以下 タテヨコmm略> ・・・資料 60

を上下に、接してつながるように貼り、左側前方壁には、同様に

『質素なリゾート・レストラン A』

‘01・9 (マレーシア・ティオマン島 31 枚 1,080×3,380) と

『真如堂 A』 ‘07・4 (京都・左京区 92 枚 3,440×4,680)

を上下に貼り込んだ。この部分はかまぼこ型天井の突端まで、約 6m ある両脇の壁面だから、見上げるような高さである。「B4サイズの紙をどんどん継ぎ足して(joint paper)ひとつの大きなドローイングとなるようにしている」とは、前回の展示の際述べたが、70 枚綴り¥840(2007年当時価格)の廉価用紙ゆえ、紙の裏表も気にせず使用。基本的には我が膝の上に「パカッ！」とスケッチ・ブックを開きそのまま鉛筆で線描きしていく。無計画に縦横無尽に描きすすめていくので、出来上がった時点でのものは決してきちりとした矩形には収まらず、上下左右に延びたり縮んだりしている。だから、ここの展示の場合もひとつのドローイングと別のドローイングを上下になるべく接する部分が多くなるように貼り合わせていってもどこかに「ポカッ！」と抜けているところが出る。これを利用したパフォーマンスの様子は後で述べる。※

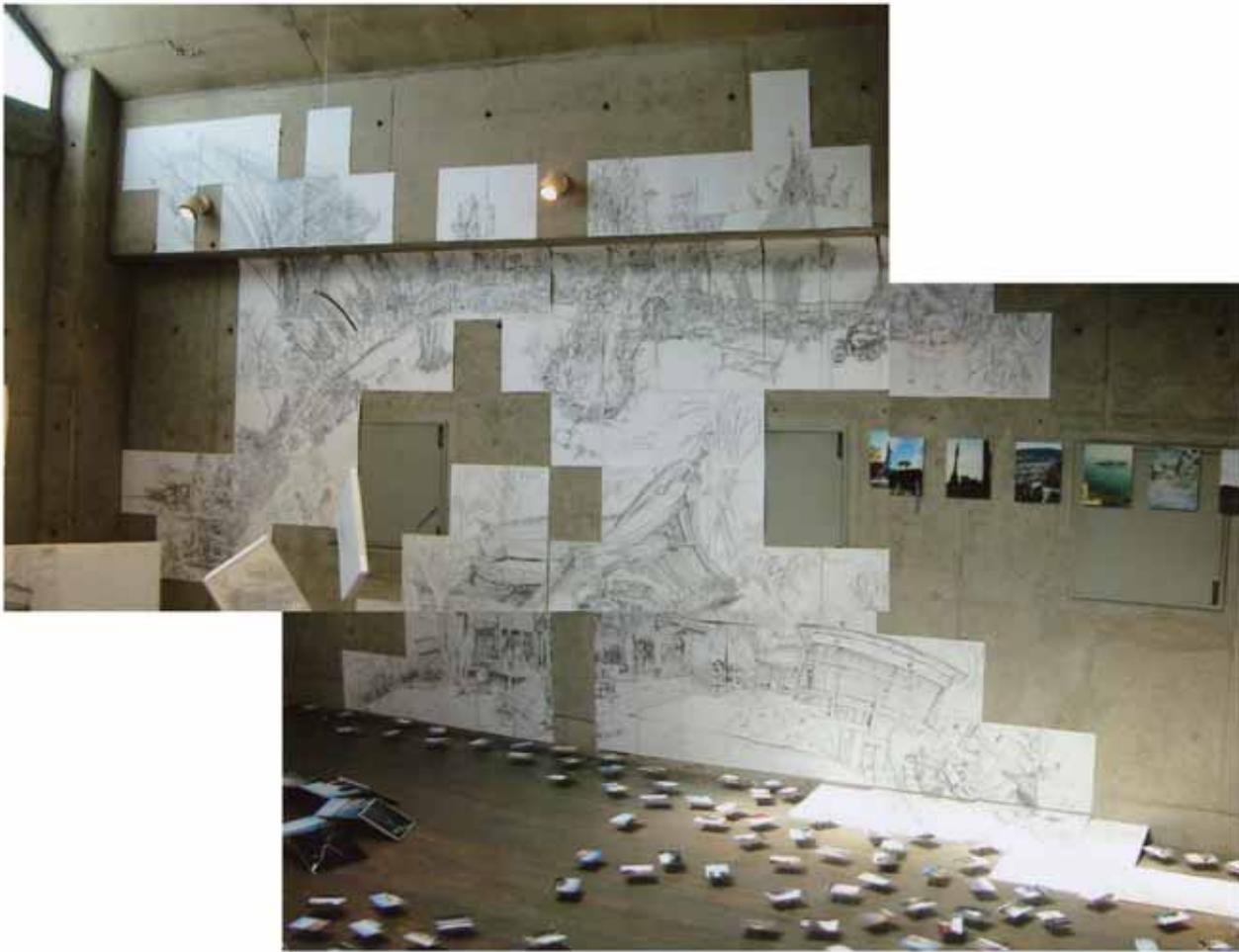
天井が一段と低くなっている入口近くの壁面にも

『浜辺の詩』‘05・6(タイ・タオ島 36 枚 1,440×4,680) を上に

『イースターのころ庭で寛ぐペートル一家』

‘06・4(ルーマニア・シゲット、マルマツィエイ 35 枚 1,800×2,860)

をを下に接して貼った。 <尚、『』内の作品名は、すべて仮名のものである>



正面奥の床には白色プラスチック・ボードでインスタント屏風仕立てのものを組み、jazz のレコードを聴かせる「映画館」という名の 60 年代風 Café & Bar の室内をぐるりと 360 度描いたもの‘04・8 (東京・文京区/白山 55 枚 1,440×4,940)と 店の外観と周辺を 180 度描いたもの‘04・9 (東京・文京区/白山 60 枚 2,160×3,900)とを それぞれ裏面と表面に貼り分けた。

屏風前には、高さ約 6m の天井から釣り糸を下げ、その先にやはり釣用の「てんびん」(、昨年使用したものと同種だが、「回転やり戻し」じゃなかった。)を付け両端からも短めの釣り糸を垂らして¥100 ショップで購入した塩化ビニル製の半透明のソフト・ケース(B4 判)を吊るした。ケースの中に、ふたつのドローイングの束 『下鴨神社』‘06・8(京都市・左京区 88 枚) と、『アイル・バタン』‘03・7(マレーシア・ティオマン島 29 枚)を入れると、その重さで床から 10cm と 30cm 程の低さにまで下がり、二つの束は共に大きく回転しながら、小さくそれぞれがクルクルと舞っていた。

ドローイングの回転幅に合わせて三寸釘を各コーナーに刺して床から浮かせたスチレン・ボード 12 枚を円形に並べた上に昨年同様の スエズ運河‘91 の「Fuji Around The World」を貼り、その外側の辺から床に斜めがけに ヨコハマ国際華火大会‘02 の「Fuji…」(いずれも六切り判)を置いた。名づけて「Dancing Hunging Drawing」「Circular Fuji A.W.」

これを「屏風」前左に、右には『メコン河畔の休み処より』‘04(ラオス・ヴァンヴィエン 37 枚) 『シュウエタゴン・パゴダ』‘04(ミャンマー・ヤンゴン 44 枚)を「D.H.Drawing」に、海と闇の針金フジの写真を 8 種類づつ「Circular Fuji A.W.」にセットして置いた。

UMI の内容は

- 1 アデンの東(湾岸戦争 勃発の日付入り) '91
- 2 スロベニア/ピラン '98
- 3 タイ/ピーピー島 '93
- 4 ポーランド/ヴェステルプラッツ(ドイツ軍侵攻の地) '98
- 5 イタリア/パレルモ '96
- 6 ヴェトナム/ハロン湾 '04
- 7 インドネシア/ギリ・アイル '04
- 8 沖縄/万座毛 '04

YAMI の内容は

- 1 ヴェトナム/ハノイ・ホアンキエム湖 04
- 2 イタリア/ナポリ '93
- 3 ギリシャ/テッサロニキ '91
- 4 ドイツ/ニュールンベルグ '93
- 5 オーストリア/ウィーン '93
- 6 キプロス/リマソール '91
- 7 キューバ/ハバナ '91
- 8 マレーシア/クチン '04

・・・資料 61



「Fuji Around The World」約 200 枚サービス判(という言い方も、すでに伝わりにくそうだが)を同サイズのステン・ボードに貼り、やはり床から一寸五分(約 37.5 mm)浮かせて、画廊のフロア全体に「世界での針金フジ」を展開した。

※(上記) 会期半ばにパフォーマンスを行う。

- ① 床上にバラバラに撒かれた「フジ写真」を集合させ、並べていく。

真ん中に大きく太く、Lを形づくりその大Lを基点に、横に IGH.T. ETTER. IVE. UCK と Lに繋がる文字を形作っていき、縦には OVE. OOK. INK. EVEL. IBERAL と続き、最後の文字 ASH だけを逆さに並べた。

・・・資料 62

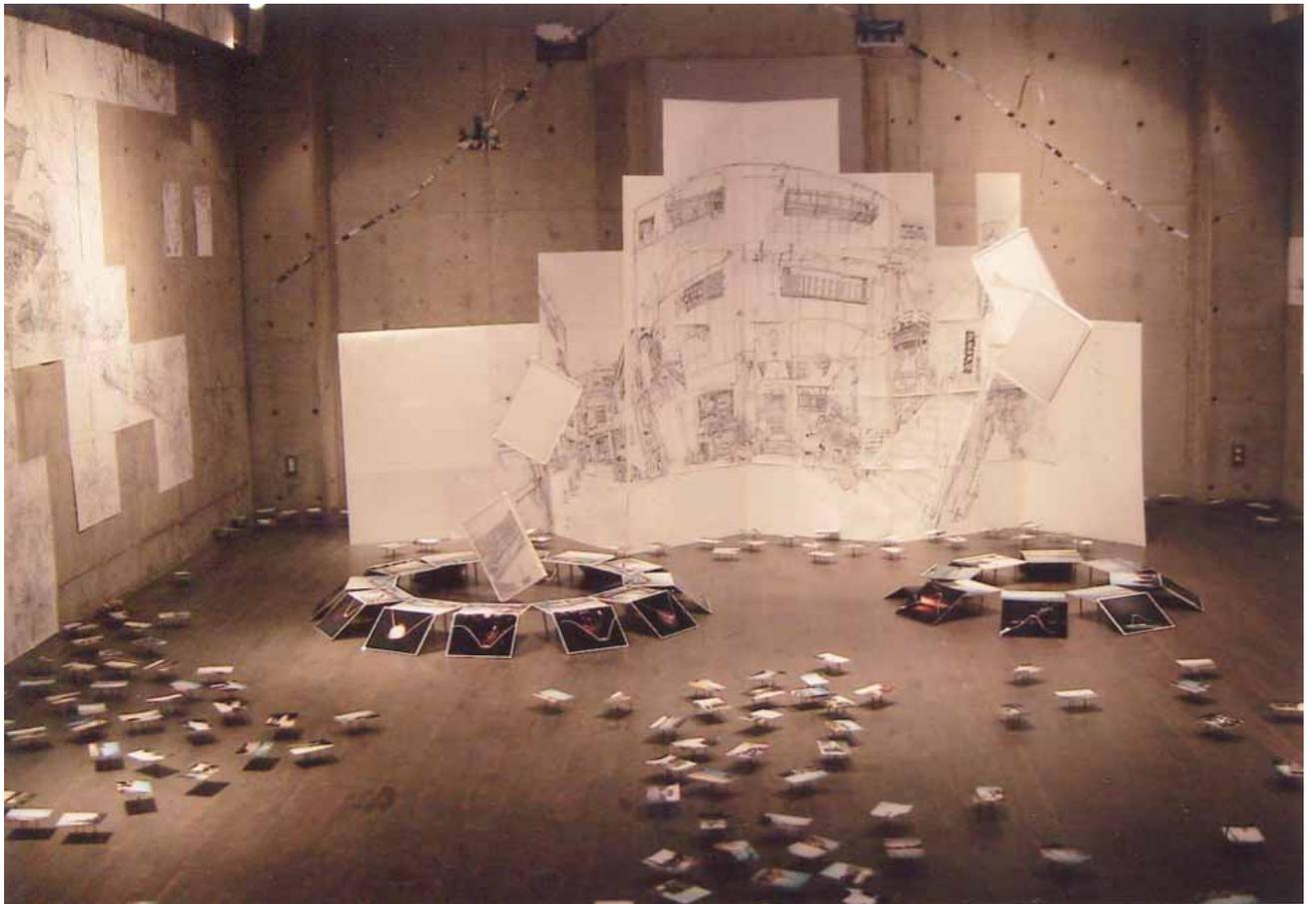
- ② 正面奥の壁の中ほどに貼っておいたジグソー・パズル仕立ての 四種の「フジ写真」

- 韓国人被爆者慰霊碑 '93(広島市/撮影当時は平和公園の外に置かれていた)
- 京都御所の東北の角、鬼門にあたる処。通称「猿ガ辻」'06
- 沖縄本島、米須原の 魂魄の塔 '04
- 皇居、平川門(東北の位置にある)と満開の桜 '05 〈四切判〉

の部分、部分を分解、接続して大きな円になるようにして一旦、床上に置き接続部分と残りの集合部を加えて正面奥の上部壁面に移動し「フジ」の形状に貼り直した。

・・・料 63





- ③ この空間に同じサイズ(B4)の紙を貼り、場所も時間も異なる二つのドローイングを繋ぎ結びつける線を即興で描いた。(各壁面一箇所ずつ、三箇所)

パフォーマンス時の B.G.M.は '06 鴨川で使用したものと同一。
尚、展示会場には常時私がプログラミングした音楽が、かなりの音量で響いている。
ルーマニアの幼児たちの歌あり、タイの演歌あり、山口百恵あり…で、今回は 145 曲

又、別の日の「軽美術のタベ」では、
会場入口近くの床に置かれていた 30cm 四方のスタンド・ミラー(そこにはフジの左右の裾野と頂上になるようにその部分の針金が異なった風景の中に入って写されていて全体でひとつのフジになるように、フォト・プリント・シールが貼られている。) を左手に持ち、右手には小型のビデオ・カメラを取り付けた三脚を高々とかけ、床上のアチラコチらに撒き置かれた「Fuji Around The World」の間を、素足に雪駄履きのいでたちで
タンゴの曲にのって、後ろ向きに舞い踊った(?) V.T.R.には鏡の「フジ」とともに周囲(観客も)の状況が撮影されている。……………ってな余興。

※ ※個展

作家によって個人差があると思うが、私の場合 1969 年以来、個展の会場費を支払ったのはたった一回のみ。といっても貸し画廊を借りて、画廊代を踏み倒した訳ではない。会場費を支払って借りたのは、1979 年 8 月の神奈川県民ギャラリーだけだ。ここは、公共団体の施設ゆえ私にも支払い可能なものだった。1970 年当時手取り ¥33000 で、家賃 ¥12000 の暮らしでは、いかに田村画廊の画廊代が安かろうと、とても支払えるものではなかったし、それを捻出するために余分に働こうという気持ちも無かった。それよりも、己の美術作品に対する過剰な投資をするほど「美術」に幻想はもたなかったし、現在でももってはいない。だから個展のほとんどは、画廊主や担当者による“お情け”とでも云う感じで、他の作家の予約がキャンセルになり、穴があきそうだからとか、画廊開廊何周年記念だからとか、友人作家の推薦によるものだった。近年になり「ウチの画廊でやってみないか？」というお誘いを頂いたものには、大変感謝している。そんなわけで、発表歴のわりには個展の数がかなり少ない。ほぼ、10 年に一回の自分の個展のことを、“十年に一度の大祭・御開

帳”なんてシャレのめしたりしているこの頃である。

※グループ展

私自身が直接かかわり、数人の仲間とともに意識的にグループをつくったもの、又、そのグループによる展開だけを私はグループ展と称している。

※多人数展・企画展参加

勿論、自らの意志でかかわりをもつことには違いないが、既成の“展”に参加したものをグループ展と区別するために、私は、多人数展と称している。又、美術館等の企画による展覧会に参加したものを、企画展参加としている。

※発表不可能展

第一回箱根・彫刻の森や、もっと前のシェル美術賞展等、公募に応募出品したものの、落選という線引きのため、作品として日の目をみなかったものを私の内では、発表不可能展としている。

例外として、1977年4月の第一回現代版画大賞展がある。入選という線引きのおかげで日の目を見たのだから、発表可能展とすべきところだが、ここでは、多人数展に入れた。

作家には敬称を略しました

2009年3月

作家による“書き物など”

月刊誌 連載 (94・7-95・7) BT美術手帖 美術出版社 発行

ふじ借景 FUJI AROUND THE WORLD

写真・文・イラスト

季刊誌 連載 (97~98) 季刊 子どもと健康 労働教育センター刊 素旅素描

スケッチ・文

週刊誌 97・12・5 週間金曜日 きんようぶんか欄 (美術) ゴミとお宝 ニセ・ホンマモン

文・写真

月刊誌 72・2 美術手帖 《表現現場 72》タイトルに代えて… <すっかりだめな僕たち>展

鈴木 重夫 と共著/文

月刊誌 82?美術手帖 (プレイ・ボックス)コダックとサクラで作るフジ・フォルム

考案・作

季刊 87・4・1 夢の庭 夢庭庵陶房 発行

パッパパラ - のハッタの年

文

月刊誌 83・2 美術手帖 (ARTFOCUS) 富士山のまる見え

文・写真

月刊誌 99・3・20 月刊 『あいだ』 39号 美術と美術館のあいだを考える会 発行

ひとつの画廊の終焉と周縁の観客のつどひ

文

月刊誌 2000・6・20 月刊 『あいだ』 54号 美術と美術館のあいだを考える会 発行

まなざしめざしこころざし 日の丸・国旗法制化をめぐる

文

月刊誌 1977・6・30 郷土教育 217

現場からの教育告発

文・写真

大森八中からの提起~その1~

文

季刊誌 連載 ('89~'90) 季刊 福祉労働 42~47

少数異見

文

季刊誌 連載 ('85~'87) 大田教育新聞

公害シリ - ズ ~ + (最終回)

「視覚公害」その1~その3 「学校美学」その1~その4

文・写真

隔月刊誌 連載 ('87~'89) 働く区民 ガッコの垣根のウチ・ソトより その1~その10 上・下/その終わり

季刊誌

文・イラスト

不定期刊行 [作家本人による] ('74~'75) 『まんが論法』 その一~その四

『がまん論法』

文・イラスト

月刊誌 2006・3・26 月間『あいだ』 123号 美術と美術館のあいだを考える会 発行

貴賓席・番外 夜目・遠目・仲間内 国立国際美術館新築1周年記念連続シンポジウム

「野生の時代 再考 戦後日本美術史」見聞記(120号) を読んで

文

隔月刊誌 1997・1~5 へるめす

イラスト